



# 降誕祭徹夜禱

晩堂大課  
早課

2014年01月 釧路管轄司祭ステファン内田 作成  
2015年12月 一部訂正

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ  
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、

誦經) アミン。

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじつ しん あ とくろ もの み とくろ もの ばんぜん ほうぞう  
天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の寶藏

もの せいめい たも しゅ きた われら うち お われら もろもろ けがれ いさぎよ  
なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、

しぜんしゃ われら たましい すく たま  
至善者よ、我等の靈を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。

せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん おこな  
天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行

ごと ち おこな わ にちよう かつて こんにちわれら あた たま われら おいめ もの  
わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を

われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら きょうあく すく  
我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い

たま  
給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。

誦經) アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【 第4聖詠 】

わ ぎ かみ わ よ とき われ き たま わ せまき あ とき なんぢわれ ひろき あた われ  
吾が義の神よ、吾が籲ぶ時、我に聴き給え。我が狭に在る時、爾我に廣を與えたり。我  
あわれ わ いのり き たま ひと こ わ さかえ はづか いづれ とき いた なんぢ  
を憐みて、我が禱を聴き給え。人の子よ、我が榮の辱しめらるること何の時に至るか、爾  
らむなしき この いつわり もと いづれ とき いた なんぢらしゆ そのせいしや わか おのれ ぞく  
等虚を好み、詭を求むること何の時に至るか。爾等主が其聖者を析ちて己に屬せ  
しめしををし われよ しゆ これ き いか つみ おか なか とこ あ なんぢら ころろ はか  
りて、己を鎮めよ。義の祭を獻げて主を恃め。多くの者は言う、誰か我等に善を示さん。主  
よ、爾の顔の光を我等に顯し給え。爾の我が心に樂を滿つるは、彼等が餅と酒と  
あぶら ゆたか とき まさ われあんぜん ふ い けだししゆ ひとりなんぢ われ ぶなん よ  
油に豊なる時より勝れり。我安然として偃し寝ぬ、蓋主よ、獨爾は我に無難にして世  
わた たま  
を渡らしめ給う。

【 第6聖詠 】

しゆ なんぢ いきどおり もつ われ せ なか なんぢ いかり もつ われ ばつ なか しゆ われ  
主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。主よ、我を  
あわれ たま われよわ しゆ われ いや たま わ ほね おのの わ たましい はなはだおのの  
憐み給え、我弱ければなり、主よ、我を醫し給え、我が骸は慄き、我が靈も甚慄け  
ばなり、爾主よ、何の時に至るか。主よ面を轉し、我が靈を免れしめ、爾の憐に  
よ われ すく たま けだしし うち なんぢ きおく はか うち だれ なんぢ さんよう われ  
由りて我を救い給え。蓋死の中には爾を記憶するなし、墓の中には誰か爾を讚揚せん。我  
なげき つか まいやわ とこ あら わ なみだ われ しとね うるお わ め うれい よ か  
嘆にて憊れたり、毎夜我が榻を滌い、我が涙にて我の褥を濡す。我が眼は憂に因りて枯  
れ、我が諸の敵に由りて衰えたり。凡そ不法を行ふ者は我を離れよ、蓋主は我が泣く聲  
き しゆ わ ねがい き たま しゆ わ いのり い ねが わ もろもろ てき はづか  
を聞けり、主は我が願を聴き給えり、主は我が禱を納れんとす。願わくは我が諸の敵は辱  
しめられて痛く撃たれん、願わくは退きて俄に愧を得ん。

【 第12聖詠 】

しゆ われ まつた わす いづれ とき いた なんぢ おもて われ かく いづれ とき いた  
主よ、我を全く忘ること何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至る  
か、我が己の靈の中に謀り、心の中に日夜憂を懐くこと何の時に至るか、我が敵の  
われ たか いづれ とき いた しゆわ かみ かえり われ き たま わ め あきらか  
我に高ぶること何の時に至るか。主我が神よ、顧みて我に聴き給え。我が目を明にして、

われ し ねむり い たま わ てき われ かれ か い ため われ せ もの われ  
我を死の 寐に寝ねざらしめ 給え、我が敵が我は彼に勝てりと曰わざらん爲、我を攻むる者が我

うご とき よろこ ため われなんぢ あわれみ たの わ ころなんぢ すくい よろこ われおん  
の撼く時に 喜ばざらん爲なり。我爾の 憐を待み、我が心 爾の救を喜ばん、我恩

ほどこ しゅ ほ うた しじょう しゅ な あが うた  
を 施す主を讃め頌い、至上なる主の名を崇め歌わん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ  
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

かみ われら とも いほうじん これ し したが えよ かみ われら とも  
神は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて 従えよ、神は我等と偕にすればなり、



誦經) ち はて これ き  
地の極までも之を聴け、



誦經) けんりよく もの したが  
権力ある者よ、従え、



誦經) またいきおい は またやぶ  
復勢を張らば、復敗られん、



誦經) はかりごと もう しゅ これ こぼ  
謀を設けば、主は之を毀たん、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>ことば</sup> <sup>いだ</sup> <sup>かならずな</sup>  
言 を 出 さ ば、 必 成 ら ざ ら ん、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>なんぢら</sup> <sup>おそ</sup> <sup>ところ</sup> <sup>われら</sup> <sup>おそ</sup> <sup>おどろ</sup>  
爾 等 の 畏 る 所 は 我 等 畏 れ ず、 驚 か ず、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>しゅわ</sup> <sup>かみ</sup> <sup>もつ</sup> <sup>せい</sup> <sup>な</sup> <sup>かれ</sup> <sup>わ</sup> <sup>おそれ</sup>  
主 我 が 神 を 以 て 聖 と 爲 す、 彼 は 我 が 畏 と なら ん、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>われかれ</sup> <sup>たの</sup> <sup>かなら</sup> <sup>われ</sup> <sup>せい</sup>  
我 彼 を 頼 ま ば 必 ず 我 を 聖 に せん、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>われかれ</sup> <sup>のぞ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>よ</sup> <sup>すくい</sup> <sup>え</sup>  
我 彼 を 望 み、 彼 に 因 り て 救 を 得 ん、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>み</sup> <sup>われおよ</sup> <sup>かみ</sup> <sup>われ</sup> <sup>あた</sup> <sup>しよし</sup> <sup>ここ</sup> <sup>あ</sup>  
視 よ、 我 及 び 神 が 我 に 與 え た る 諸 子 は 此 に 在 り、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>くらやみ</sup> <sup>うち</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>たみ</sup> <sup>おお</sup> <sup>ひかり</sup> <sup>み</sup>  
幽 闇 の 中 を 行 く 民 は 大 な る 光 を 見 た り、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>し</sup> <sup>かげ</sup> <sup>ち</sup> <sup>お</sup> <sup>もの</sup> <sup>ひかり</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>てら</sup>  
死 の 蔭 の 地 に 居 る 者 よ、 光 は 爾 等 を 照 さ ん、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) けだしおさなご われら ため うま こ われら たま  
蓋 嬰 は我等の爲に生れ、子は我等に賜わりたり、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) けんべい そのかた あ  
權 柄 は其 肩 に在り、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) そのわへい おわり  
其 和 平 は 終 な し、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) そのな おおい ぎじ ししや と な  
其 名 は 大 なる 議 事 の 使 者 と 稱 え ら る、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) しんみょう ぎし と な  
神 妙 なる 議 士 と 稱 え ら る、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) だいのう かみ しゅさい わへい きみ と な  
大 能 の 神 、 主 宰 、 和 平 の 君 と 稱 え ら る、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) らいせい ちち と な  
來 世 の 父 と 稱 え ら る、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 偕

誦經) かみ われら とも いほうじん これ し したが  
神 は我等と偕にす、異邦人よ、此を知りて 従 えよ、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>こうえい</sup>光 <sup>ちち</sup>榮は父と子と<sup>こ</sup>聖<sup>せいしん</sup>神に<sup>き</sup>歸す、

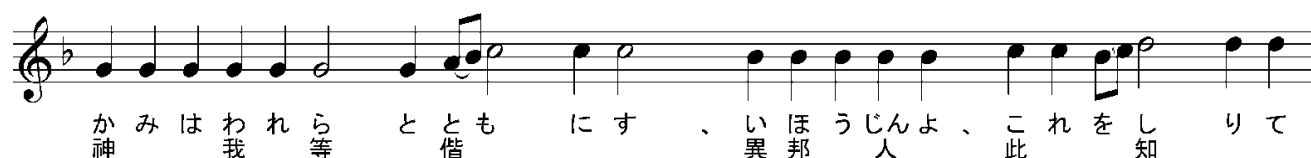


か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕

誦經) <sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世世に、アミン、



か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
神 我 等 と 偕



か み は わ れ ら と と も に す 、 い ほ う じ ん よ 、 こ れ を し り て  
神 我 等 と 偕 に す 、 異 邦 人 此 を 知 り て



し た が え よ 。 か み は わ れ ら と と も に す れ ば な り 。  
從 神 我 等 と 偕

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>ひ</sup>日を送りて<sup>おく</sup>爾に<sup>なんぢ</sup>感謝す、<sup>かんしゃ</sup>救世主よ、<sup>きゆうせいしゅ</sup>求む、<sup>もと</sup>我に<sup>われ</sup>罪なく<sup>つみ</sup>暮と<sup>くれ</sup>夜とを<sup>よる</sup>度らしめて、<sup>わた</sup>我  
を<sup>すく</sup>救い<sup>たま</sup>給え。

<sup>こうえい</sup>光 <sup>ちち</sup>榮は父と子と<sup>こ</sup>聖<sup>せいしん</sup>神に<sup>き</sup>歸す。

<sup>しゅさい</sup>主宰よ、<sup>ひ</sup>日を送りて<sup>おく</sup>爾を<sup>なんぢ</sup>讚<sup>さんえい</sup>榮す、<sup>きゆうせいしゅ</sup>救世主よ、<sup>もと</sup>我に<sup>われ</sup>誘<sup>いざない</sup>なく<sup>くれ</sup>暮と<sup>よる</sup>夜とを<sup>わた</sup>度らし  
めて、<sup>われ</sup>我を<sup>すく</sup>救い<sup>たま</sup>給え。

<sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世世に、アミン、

<sup>せい</sup>聖なる<sup>もの</sup>者よ、<sup>ひ</sup>日を送りて<sup>おく</sup>爾を<sup>なんぢ</sup>讚<sup>さんしょう</sup>頌す、<sup>きゆうせいしゅ</sup>救世主よ、<sup>もと</sup>我に<sup>われ</sup>無難に<sup>ぶなん</sup>暮と<sup>くれ</sup>夜とを<sup>よる</sup>度ら  
しめて、<sup>われ</sup>我を<sup>すく</sup>救い<sup>たま</sup>給え。

<sup>むけい</sup>無形の<sup>せい</sup>性のヘルヴィムは<sup>や</sup>息めざる<sup>うた</sup>歌にて<sup>なんぢ</sup>爾を<sup>ほ</sup>讚め<sup>あ</sup>揚げ、<sup>りくよく</sup>六翼の<sup>ぞうぶつ</sup>造物セラフィムは<sup>た</sup>絶えざる<sup>こえ</sup>聲に

<sup>なんぢ</sup>爾を<sup>とうと</sup>尊み<sup>うた</sup>歌い、<sup>てんし</sup>天使の<sup>ばんぐん</sup>萬軍は<sup>せいさん</sup>聖三の<sup>うた</sup>歌にて<sup>なんぢ</sup>爾を<sup>あが</sup>崇め<sup>ほ</sup>讚む、<sup>けだしなんぢ</sup>蓋<sup>ばんゆう</sup>爾は<sup>さき</sup>萬有の<sup>さき</sup>先より

<sup>みつか</sup>自<sup>そん</sup>ら<sup>ちち</sup>存する<sup>どうむげん</sup>父にして、<sup>なんぢ</sup>同<sup>こ</sup>無原なる<sup>たも</sup>爾の子を<sup>どうそん</sup>有ち、<sup>いのち</sup>同<sup>しん</sup>尊なる<sup>いだ</sup>生命の<sup>さんい</sup>神を出し、<sup>わか</sup>三位の<sup>わか</sup>分れざ

あらわ たま  
るを 顯し給う。

しせい どうていちよ かみ はは した せいげん み これ つと もの よげんしゃおよ ちめいしゃ むれ  
至聖なる童貞女・神の母と、親しく聖言を見て之に役めし者と、預言者及び致命者の群

し いのち たも よ われら ため せつ いの たま われらみなくなん うち あ ねが  
よ、死せざる生命を有つに因りて、我等の爲に切に祈り給え、我等皆苦難の中に在ればなり。願

われらきょうあく いざない のが てんし うた うた せい せい せい さんせい しゅ われら  
わくは我等凶悪の誘を遁れて、天使の歌を歌わん、聖、聖、聖なる三聖の主よ、我等を

あわれ すく たま  
憐みて救い給え、アミン。

## 【 信經 】

われしん ひとつ かみ ちち ぜんのおしや てん ち み み ばんぶつ つく しゅ またしん  
我信ず、一の神・父・全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を、又信ず、

ひとつ しゅ かみ どくせい こ よろずよ さき ちち うま ひかり ひかり まこと  
一の主イイスス・ハリストス神の獨生の子、萬世の前に父より生れ、光よりの光、眞の

かみ まこと かみ うま もの つく あら ちち いつたい ばんぶつかれ つく われら  
神よりの眞の神、生れし者にて造られしに非ず、父と一体にして萬物彼に造られ、我等

ひとひと ため またわれら すくい ため てん くだ せいしんおよ どうていちよ み と ひと な  
人人の爲、又我等の救の爲に天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身を取り人と爲り、

われら ため とき じゅうじか くぎ くるしみ う ほうむ だいさんじつ せいしよ  
我等の爲にポンティイ・ピラトの時、十字架に釘うたれ 苦を受け 葬られ、第三日に聖書に

かな ふくかつ てん のぼ ちち みぎ ざ こうえい あらわ い もの し もの しんぼん ため  
應いて復活し、天に升起父の右に坐し、光榮を顯して生ける者と死せし者とを審判する爲

またきた そのくにおわり またしん せいしん しゅ いのち ほどこ もの ちち い ちちおよ  
に還來り、其國終なからんを。又信ず、聖神・主・生を施す者、父より出で、父及び

こ とも おが ほ よげんしゃ もつ かつ い またしん ひとつ せい おおやけ すと  
子と共に拜まれ讃められ、預言者を以て嘗て言いしを。又信ず、一の聖なる公なる使徒の

きょうかい われみと ひとつ せんれい もつ つみ ゆるし う われのぞ ししゃ ふくかつ ならび らいせ  
教會を、我認む、一の洗禮、以て罪の赦を得るを、我望む、死者の復活、並に來世

いのち  
の生命を、アミン。

しせい ちよさい しょうしんぢよ われらざいにん ため いの たま  
至聖なる女宰・生神女よ、我等罪人の爲に祈り給え。

しせい ちよさい しょうしんぢよ われらざいにん ため いの たま  
至聖なる女宰・生神女よ、我等罪人の爲に祈り給え。



しせいなるぢよさいしょうしんぢよよ、われらざいにんのたためにいのりたまえ。  
至聖女宰生神女、我等罪人爲祈給

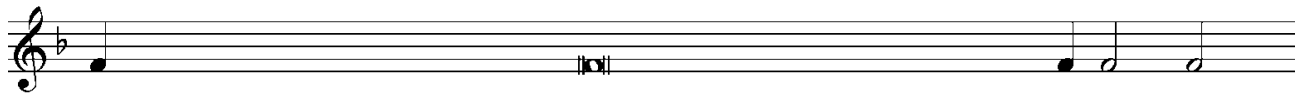
誦經) せいてんしおよ てんししゅ ぜんぐん われらざいにん ため いの たま  
聖天使及び天使首の全軍よ、我等罪人の爲に祈り給え。



せいてんしおよびてんししゅのぜんぐんよ、われらざいにんのたためにいのりたまえ。  
聖天使及天使首全軍、我等罪人爲祈給

誦經) せいよげんしゃ わ しゅ ぜんくじゅせん われらざいにん ため いの たま  
聖預言者イオアン、吾が主イイススハリストスの前驅授洗よ、我等罪人の爲に祈り給え。



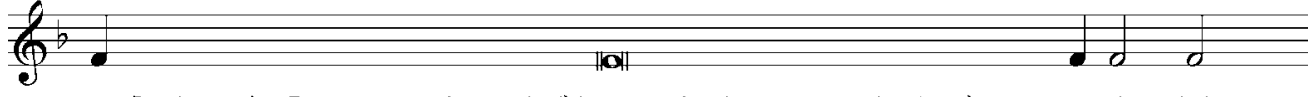


せいよげんしゃイオアン、わがしゅいイススハリストスのぜんくじゅせんよ、  
 聖預言者 吾主 前のぜんくじゅせんよ

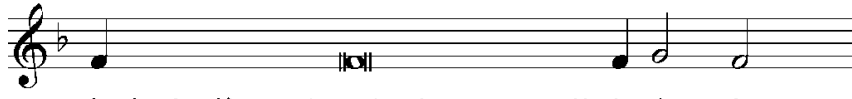


われらざいにんのためにいのりたまえ。  
 我等罪人 爲 祈 給

誦經) こうめいせいしとよげんしゃちめいしゃおよしよせいじん われらざいにん ため いの たま  
 光明なる聖使徒、預言者、致命者、及び諸聖人よ、我等罪人の爲に祈り給え。



こうめいなるせいしと、よげんしゃ、ちめいしゃ、およびしよせいじんよ、  
 光明 聖使徒 預言者 致命者 及 び 諸聖人

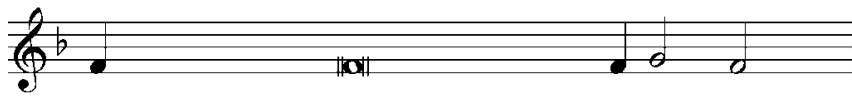


われらざいにんのためにいのりたまえ。  
 我等罪人 爲 祈 給

誦經) こくしょうほうしん わがしよしんぶ ぜんせかい ぼくしゃおよきょうし われらざいにん ため いの たま  
 克肖捧神なる我が諸神父、全世界の牧者及び教師よ、我等罪人の爲に祈り給え。

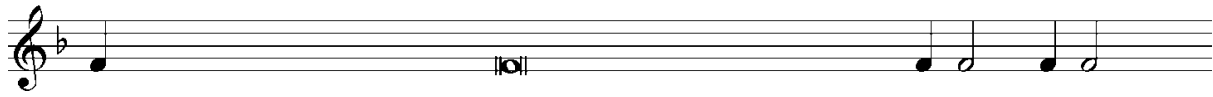


こくしょうほうしんなるわがしよしんぶ、ぜんせかいのぼくしゃおよびきょうしよ、  
 克肖捧神 我 諸神父 全世界 牧者及 教師

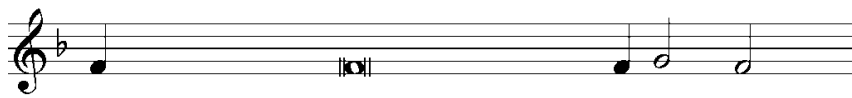


われらざいにんのためにいのりたまえ。  
 我等罪人 爲 祈 給

誦經) こうめいあしとにほんだいしゅきょうせい われらざいにん ため いの たま  
 光明なる亜使徒日本の大主教聖ニコライよ、我等罪人の爲に祈り給え。



こうめいなるあしとにほんのだいしゅきょうせいニコライよ、  
 光明 亜使徒 日本 大主教 聖

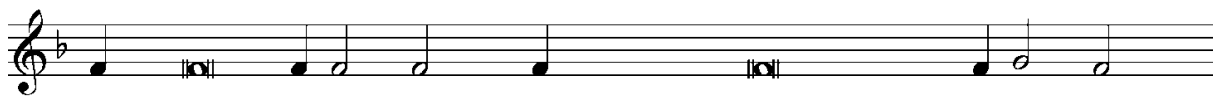


われらざいにんのためにいのりたまえ。  
 我等罪人 爲 祈 給

誦經) とうと いのち ほどこ じゅうじか やぶ はか せい ちから われらざいにん はな なか  
 尊くして生命を施す十字架の敗られず量られざる聖なる力よ、我等罪人を離るる勿れ。



とうとくしていのちをほどこすじゅうじかのやぶられずはかられざる  
 尊 生 命 施 十 字 架 敗 量



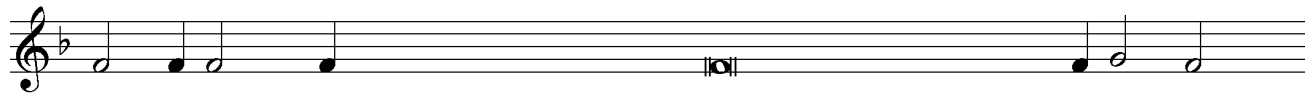
せいなるちからよ、われらざいにんをはなるるなかれ。  
 聖 力 我 等 罪 人 離 勿

誦經) <sup>かみ われらざいにん きよ たま</sup> 神よ、我等罪人を浄め給え。



か み よ 、 わ れ ら ざ い に ん を き よ め た ま え 。  
神 我 等 罪 人 浄 給

誦經) <sup>かみ われらざいにん きよ われらあわれ たま</sup> 神よ、我等罪人を浄めて、我等を憐み給え。

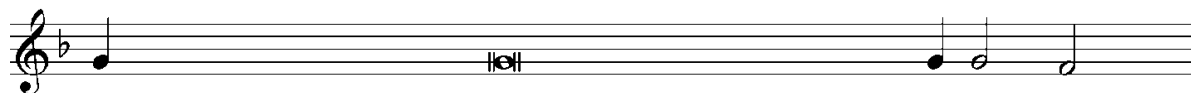


か み よ 、 わ れ ら ざ い に ん を き よ め て 、 わ れ ら を あ わ れ み た ま え 。  
神 我 等 罪 人 浄 我 等 憐 給

アポリテキオン  
【 発 放 讃 詞 】



ハリストスわが か み よ 、  
我 神



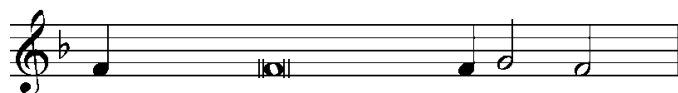
なんぢの こ う た ん は せ か い に ち え の ひ か り を て ら せ り 、  
爾 降 誕 世 界 智 慧 光 照



これによりてほしにつとむ るものはほしにおしえられて、  
此 由 星 勤 者 は 星 教



なんぢぎのひをおが み、なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
爾 義 日 拜 み、 爾 上 東 覚



しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸

誦經) <sup>しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ</sup> 主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、 今 も 何 時 も 世 世 に。 ア ミ ン。

<sup>とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ しょう</sup>  
ヘルヴィムより 尊く、セラフィムに 並なく榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生

<sup>しんぢょ なんぢ あが ほ</sup>  
神女たる 爾 を 崇め讃む。

<sup>しんぶ しゅ な もつ ふく くだ</sup>  
神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭) <sup>しゅ われら かみ わ しょせいしんぶ きとう よ われら あわれ たま</sup> 主 イイススハリストス我等の神よ、吾が諸 聖 神父の祈禱に依りて我等を 憐み給え。

誦經) アミン。

【 聖大ワシリイの祝文 】

しゅ しゅ われら ひる もろもろ ながれや のが もの われら くらやみ ゆ もろもろ がい  
主よ、主よ、我等を晝の 諸 の 流矢より脱れしめし者よ、我等を闇冥に行く 諸 の 害よ  
のが たま わ て あ くれ まつり う たま われら あやまち あく いざな  
り脱れしめ給え。我が手を擧ぐるを晩の 祭 として受け給え。我等に 過 なく、悪に 誘 われず  
して、夜の路を過らしめ給え。我等を悪魔より来る 諸 の紛擾と畏懼より脱れしめ給え。我等  
たましい かんどう あた われら ころ おそ ぎ なんぢ しんぱん こた おもんぱか  
の 靈 に感動を與え、我等の 心 に畏るべき義なる 爾 の 審判に對うべきことを 慮 らし  
たま われら からだ なんぢ おそ おそれ くぎ たま われら ち あ にくよく ころ たま われ  
め給え。我等の 體 を 爾 を 畏るるの 畏 に釘うち給え、我等が地に在る肉 慾 を 殺し給え。我  
ら ねむり しづか と き なんぢ いましめ み よ てら え たま われら もろもろ  
等が 眠 の 靜 なる時にも 爾 の 誠 を見るに因りて照さるるを得しめ給え。我等より 諸 の  
もうそう がい よく のぞ たま われら きとう と き おこ わ しん かた なんぢ いましめ おこな  
妄想と害ある慾とを除き給え。我等を祈禱の時に興して、我が信を固め、 爾 の 誠 を 行  
すす たま なんぢ どくせいし じれん じんじ よ なんぢ かれ しせいしじんいのち ほどこ  
うに進ましめ給え、 爾 が 獨生子の慈憐と仁慈に因りてなり。 爾 は彼と至聖至仁生命を 施 す  
なんぢ しん と も あが ほ いま いつ よよ  
爾 の 神と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、アミン。

きた われら おう かみ こうはい  
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく  
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

【 第50聖詠 】

かみ なんぢ おおい あわれみ よ われ あわれ なんぢ めぐみ おお よ われ ふほう け たま  
神よ、 爾 の 大なる 憐 に因りて我を 憐み、 爾 が 惠 の 多きに因りて我の不法を抹し給  
え。 屢 我を我が不法より洗い、我を我が罪より清め給え、 蓋 我は我が不法を知る、我の罪  
つね わ まえ あ われ なんぢひとりなんぢ つみ おか あく なんぢ め まえ おこな なんぢ なんぢ  
は常に我が前に在り。我は 爾 獨 爾 に罪を犯し、悪を 爾 の目の前に 行 えり、 爾 は 爾  
しんだん ぎ なんぢ さいばん おおやけ み われ ふほう おい ほん わ はは つみ おい  
の 審断に義にして、 爾 の 裁判に 公 なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て  
われ う み なんぢ ころ しんじつ あい わ うち おい ちえ われ あらわ  
我を生めり。視よ、 爾 は 心 に眞實のあるを愛し、我が表に於て智慧を我に 顯 せり。ヒソブ  
もつ われ そそ しか われいさぎよ われ あら しか われゆき しろ われ よろこび  
を以て我に沃げ、然せば我 潔 くならん、我を滌え、然せば我 雪 より白くならん。我に 喜  
たのしみ き たま しか なんぢ お ほね よろこ なんぢ かんばせ わ つみ さ わ  
と 樂 とを聞かせ給え、然せば 爾 に折られし骨は 悦 ばん。 爾 の 顔 を我が罪より避け、我  
ことごと ふほう け たま かみ いさぎよ ころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま  
が 盡 くの不法を抹し給え。神よ、 潔 き 心 を我に造れ、正しき 靈 を我の表に改め給  
われ なんぢ かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか なんぢ すくい  
え。我を 爾 の 顔 より逐うこと母れ、 爾 の 聖神を我より取り上ぐる事母れ。 爾 が 救 の

よろこび われ かえ しゅさい しん もつ われ かた たま われふほう もの なんぢ みち おし ふけん  
 喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給え。我不法の者に爾の道を教えん、不虔  
 もの なんぢ かえ なんぢ なんぢ なんぢ なんぢ なんぢ なんぢ なんぢ なんぢ なんぢ  
 の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は爾の  
 ぎ ほ あ しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ けだしなんぢ まつり  
 義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を  
 ほつ ほつ われこれ たてまつ なんぢ やきまつり よろこ かみ よろこ まつり つうかい たましい  
 欲せず、欲せば我此を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈  
 なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給わず。主よ、爾の恵に因りて恩をシ  
 オンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え。其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び  
 う そのとき ひとびとなんぢ さいだん こうし そな  
 饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠えんとす。

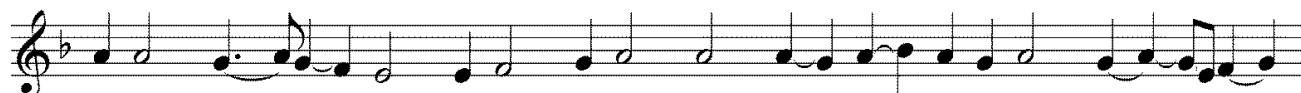
【 イウデヤ王マナツシヤの祝文 】

しゅぜんのうしゃ わ せんぞ およ ぎ すえ かみ なんぢ てんち その  
 主全能者、吾が先祖アヴラアム、イサク、イアコフ、及び義なる裔の神よ、爾は天地と其  
 すべ かざり つく なんぢ いましめ ことば うみ しば ふち と おそ さか なんぢ  
 都ての飾とを作り、爾が誠の言にて海を縛り、淵を閉ぢ、畏るべくして榮えたる爾の  
 な もつ これ ふういん ばんぶつ そのな おそ なんぢ ちから まえ おのの けだしなんぢ こうえい  
 名を以て之を封印せり、萬物は其名を恐れ、爾が力の前に戦く、蓋爾が光榮の  
 おごそか まえ だれ た あた ざいにん お なんぢ きび いかり た がた しか なんぢ  
 莊嚴なる前には誰も立つ能わず、罪人に於ける爾の厳しき怒は堪え難し、然れども爾が  
 けいやく あわれみ はか がた きわ がた けだしなんぢ じんじ かんにん こうおん ひと ざいあく うれ  
 契約の憐は測り難く、窮め難し、蓋爾は仁慈にして寛忍、鴻恩にして人の罪惡を憂  
 うる至上の主なり。爾主よ、爾が仁慈の多きに依りて、爾の前に罪を犯しし者に痛悔と  
 しゃざい けいやく なんぢ じれん おお よ ざいにん ため つうかい さだ すくい え たま  
 赦罪とを契約し、爾が慈憐の多きに依りて、罪人の爲に痛悔を定めて救を得しめ給へり。  
 ゆえ なんぢしゅ ぎじん かみ ぎ なんぢ まえ つみ おか  
 故に爾主、義人の神よ、義にして爾の前に罪を犯さざりしアヴラアム、イサク、イアコフの  
 ため つうかい た すなわちわれざいにん ため これ た たま けだしわれつみ おか うみ まさご  
 爲には痛悔を立てず、乃我罪人の爲に之を立て給へり。蓋我罪を犯ししこと海の砂  
 かず おお しゅ わ ふほう かぞ がた わ ふほう かぞ がた われ ふぎ おお よ  
 の數よりも多し。主よ、我が不法は數へ難し、我が不法は數へ難し、我は不義の多きに因りて、  
 あお てん たか み た ええず われ おお てつ くさり かが わ こうべ あ あた  
 仰ぎて天の高きを見るに堪えず。我は多くの鐵の鎖にて屈められ、我が首を擧ぐる能わず、  
 しばし やす あた いた けだしわれ なんぢ いか あく なんぢ まえ おか なんぢ むね  
 暫時も安んずる能わざるに至れり、蓋我は爾を怒らせ、惡を爾の前に犯し、爾の旨に  
 したが なんぢ めい まも けが こと おこな いざない おお な いまわ ころろ ひざ かが  
 循わず、爾の命を守らず、穢れし事を行い、誘惑を多く爲せり。今我が心の膝を屈め  
 なんぢ じんじ たま いの しゅ われつみ おか われつみ おか われ わ ふほう し しか  
 て、爾に仁慈を賜うを祈る。主よ、我罪を犯せり、我罪を犯せり。我は我が不法を知る、然  
 なんぢ いの もと しゅ われ ゆる たま われ ゆる たま われ わ ふほう とも ほろ なか  
 れども爾に祈りて求む、主よ、我を赦し給え、我を赦し給え、我を我が不法と共に亡ぼす勿  
 なが わ あく おも なか われ ぢごく さだ なか けだしかみ なんぢ つうかい もの かみ  
 れ、永く我が惡を念う勿れ、我を地獄に定むる勿れ。蓋神よ、爾は痛悔する者の神なり、

なんぢ じんじ かたぶ わ うえ あらわ なんぢ おおい あわれみ よ われふとう もの すく たま われ  
爾の仁慈を傾けて我が上に顯し、爾の大なる憐に因りて我不當の者を救い給え、我

い うちなんぢ あが ほ けだしてん しゅうぐん なんぢ ほ うた こうえい なんぢ よよ き  
生ける中 爾を崇め讃めん、蓋天の衆軍は爾を讃め頌う、光榮は爾に世世に歸す、アミ  
ン。

【 降誕祭の小讃詞 <sup>コンダック</sup> 】



いま しょ ぢよ は いま しょぢよ は え い ざいの しゅ を  
今 処 女 は 今 処 女 は 永 い 在 の 主 を



う む しゅ を う む 、  
生 む しゅ を 生 む 、



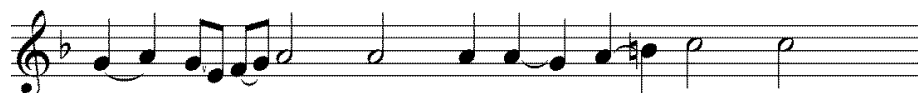
ち は ち は のせがた きもの に ほら を け んず  
地 は 地 は 戴 難 者 の に 洞 ら を け 獻



ほら を け んず 、  
洞 ら を け 獻 、



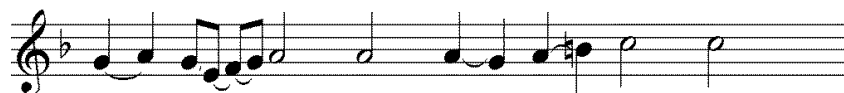
て んの つか い て んの つか い ぼくしゃ ととも に  
天 の 使 い て 天 の 使 い 牧 者 と 偕 に



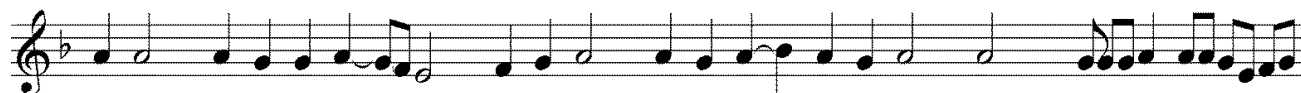
ほ め う と う ほ め う と う 、  
讃 め う と う ほ め う と う 、



は か せ は は か せ は ほ し に した が っ て  
博 か せ は は 博 か せ は ほ し に した が っ て



た び す る た び す る 、  
た び す る た び す る 、



けだ しわれらの ために えいきゆうのかみ、みどりごとして生まれ  
蓋 しわれらの ために えいきゆうのかみ、みどりごとして生まれ  
生



たり、みどりごとしてうまれたり。  
嬰 児 として 生

誦經) 主、<sup>しゅ あわれ</sup>憐めよ。主、<sup>しゅ あわれ</sup>憐めよ。主、<sup>しゅ あわれ</sup>憐めよ。

<sup>こうえい</sup>光榮は父と子と<sup>せいしん</sup>聖神に歸す、<sup>いま</sup>今も<sup>いつ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世々に。アミン。

ヘルヴィムより<sup>とうと</sup>尊く、セラフィムに<sup>ならび</sup>並なく<sup>さか</sup>榮え、<sup>みさお</sup>貞操を<sup>やぶ</sup>壊らずして<sup>かみことば</sup>神言を<sup>う</sup>生みし<sup>じつ</sup>實の<sup>しょう</sup>生

<sup>しんぢよ</sup>神女たる<sup>なんぢ</sup>爾を<sup>あが</sup>崇め<sup>ほ</sup>讃む。

<sup>しんが</sup>神父よ、<sup>しゅ</sup>主の名を<sup>な</sup>以て<sup>もつ</sup>福を<sup>ふく</sup>降せ。<sup>くだ</sup>

司祭) 主<sup>しゅ</sup>イイススハリストス<sup>われら</sup>我等の<sup>かみ</sup>神よ、<sup>わ</sup>吾が<sup>しよせいしんが</sup>諸聖神父の<sup>きとう</sup>祈禱に<sup>よ</sup>依りて<sup>われら</sup>我等を<sup>あわれ</sup>憐み<sup>たま</sup>給え。



アミ ン。

誦經) 主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>神父<sup>かみ</sup>全能<sup>ちぜん</sup>者<sup>のうしや</sup>、主<sup>しゅ</sup>獨<sup>どく</sup>生<sup>せい</sup>の子<sup>こ</sup>イイススハリストス<sup>およ</sup>及<sup>せいしん</sup>び<sup>せいしん</sup>聖神<sup>ゆいいち</sup>、<sup>しんせい</sup>唯一<sup>ゆいいち</sup>の<sup>しんせい</sup>神性<sup>ゆいいち</sup>、<sup>しんせい</sup>唯一<sup>ゆいいち</sup>の

<sup>のうりよく</sup>能力<sup>われざい</sup>よ、<sup>われざい</sup>我罪人<sup>あわれ</sup>を<sup>なんぢ</sup>憐み、<sup>し</sup>爾が<sup>ところ</sup>知る<sup>ほう</sup>所の<sup>もつ</sup>法を<sup>われふとう</sup>以て<sup>ほく</sup>我不<sup>すく</sup>當<sup>たま</sup>の<sup>けだしなんぢ</sup>僕を<sup>けだしなんぢ</sup>救い<sup>たま</sup>給え、<sup>けだしなんぢ</sup>蓋<sup>けだしなんぢ</sup>爾は

<sup>よよ</sup>世々に<sup>あが</sup>崇め<sup>ほ</sup>讃めらる、アミン。

<sup>きた</sup>來れ、<sup>われら</sup>我等の<sup>おう</sup>王・<sup>かみ</sup>神に<sup>こうはい</sup>叩拜せん。

<sup>きた</sup>來れ、<sup>われら</sup>ハリストス・<sup>おう</sup>我等の<sup>かみ</sup>王・<sup>こうはいふふく</sup>神に<sup>こうはいふふく</sup>叩拜俯伏せん。

<sup>きた</sup>來れ、<sup>われら</sup>ハリストス・<sup>おう</sup>我等の<sup>かみ</sup>王と<sup>まえ</sup>神の<sup>こうはいふふく</sup>前に<sup>こうはいふふく</sup>叩拜俯伏せん。

### 【 第69聖詠 】

<sup>かみ</sup>神よ、<sup>すみやか</sup>速に<sup>われ</sup>我を<sup>すく</sup>救え、<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>すみやか</sup>速に<sup>われ</sup>我を<sup>たま</sup>助け<sup>わ</sup>給え。<sup>たましい</sup>我が<sup>もと</sup>靈を<sup>もの</sup>求むる<sup>ねが</sup>者は、<sup>ねが</sup>願わ<sup>くは</sup>

<sup>はぢ</sup>恥を得<sup>え</sup>て<sup>はづかしめ</sup>辱<sup>う</sup>を受けん、<sup>わざわい</sup>禍<sup>われ</sup>を<sup>のぞ</sup>我に<sup>もの</sup>望む<sup>ねが</sup>者は、<sup>しりぞ</sup>願わ<sup>くは</sup>退<sup>あざ</sup>けられて<sup>われ</sup>嘲<sup>むか</sup>けられん。<sup>むか</sup>我に<sup>むか</sup>向い

<sup>よしよし</sup>て<sup>い</sup>嘻嘻<sup>もの</sup>と<sup>その</sup>云<sup>われ</sup>う<sup>はづか</sup>者は、<sup>よ</sup>其の<sup>ねが</sup>我を<sup>しりぞ</sup>辱<sup>およ</sup>しむる<sup>なんぢ</sup>に<sup>もと</sup>困<sup>もの</sup>りて、<sup>もと</sup>願わ<sup>くは</sup>退<sup>およ</sup>けられん。<sup>なんぢ</sup>凡<sup>もと</sup>そ<sup>もの</sup>爾<sup>もと</sup>を<sup>もの</sup>求<sup>もと</sup>むる<sup>もの</sup>者

<sup>ねが</sup>は、<sup>なんぢ</sup>願わ<sup>くは</sup>爾<sup>ため</sup>の<sup>よろこ</sup>爲<sup>たのし</sup>に<sup>なんぢ</sup>喜<sup>すくい</sup>び<sup>あい</sup>樂<sup>もの</sup>まん、<sup>ねが</sup>爾<sup>つね</sup>の<sup>かみ</sup>救<sup>おおい</sup>を<sup>おおい</sup>愛<sup>おおい</sup>する<sup>おおい</sup>者は、<sup>おおい</sup>願わ<sup>くは</sup>常<sup>おおい</sup>に<sup>おおい</sup>神<sup>おおい</sup>は<sup>おおい</sup>大<sup>おおい</sup>なり

<sup>い</sup>と<sup>われ</sup>云<sup>まづ</sup>わん。<sup>とぼ</sup>我<sup>かみ</sup>は<sup>われ</sup>貧<sup>いた</sup>しく<sup>たま</sup>して<sup>なんぢ</sup>乏<sup>われ</sup>し、<sup>たすけ</sup>神<sup>われ</sup>よ、<sup>すく</sup>我<sup>もの</sup>に<sup>もの</sup>格<sup>もの</sup>り<sup>もの</sup>給<sup>もの</sup>え、<sup>もの</sup>爾<sup>もの</sup>は<sup>もの</sup>我<sup>もの</sup>の<sup>もの</sup>助<sup>もの</sup>なり、<sup>もの</sup>我<sup>もの</sup>を<sup>もの</sup>救<sup>もの</sup>う<sup>もの</sup>者<sup>もの</sup>なり、

<sup>しゅ</sup>主<sup>おそな</sup>よ、<sup>なか</sup>遅<sup>なか</sup>わる<sup>なか</sup>母<sup>なか</sup>れ。

### 【 第142聖詠 】

しゅ わ いのり き なんぢ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんぢ ぎ よ われ き  
主よ、我が 禱 を聴き、 爾 の 眞 實 に依りて我が 願 に耳を 傾 けよ、 爾 の義に依りて我に聴  
たま なんぢ ぼく うつたえ な なか けだしおよ いのち もの いつ なんぢ まえ ぎ  
き 給え。 爾 の僕と 訟 を爲す母れ、 蓋 凡そ生命ある者は、一も 爾 の前に義とせられざら  
てき わ たましい お われ いのち ち ふみにじ われ ひさ し もの ごと くらき お  
ん。敵は我が 靈 を逐い、我が生命を地に 蹂 り、我を久しく死せし者の如く 暗 に居らしむ、  
わ たましい われ うち もだ わ ころ われ うち むな ごと われいにしえ ひ おも およ なんぢ  
我が 靈 は我の衷に悶え、我が 心 は我の衷に曠しきが如し。我 古 の日を想い、凡そ 爾  
おこな かんが なんぢ て わざ はか わ て の なんぢ む わ たましい かわ  
の 行 いしことを 考 え、 爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾 に向かい、我が 靈 は渴け  
ち ごと なんぢ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい おとろ なんぢ かんばせ われ  
る地の如く 爾 を慕う。主よ、 速 に我に聴き給え、我が 靈 は衰 えたり、 爾 の 顔 を我  
かく なか しか われ はか い もの ごと われ つと なんぢ あわれみ き たま われ  
に隠す母れ、然らば我は墓に入る者の如くならん。我に夙に 爾 の 憐 を聴かしめ給え、我  
なんぢ たの しゅ われ ゆ みち しめ たま わ たましい なんぢ あ しゅ  
爾 を頼めばなり。主よ、我に行くべき途を示し給え、我が 靈 を 爾 に擧ぐればなり。主よ、  
われ わ てき すく たま われなんぢ はし つ われ なんぢ むね おこな おし たま なんぢ われ  
我を我が敵より救い給え、我 爾 に趨り附く。我に 爾 の旨を行 うを教え給え、 爾 は我の  
かみ ねが なんぢ ぜん しん われ ぎ ち みちび しゅ なんぢ な よ われ い  
神なればなり、願わくは 爾 の善なる神は我を義の地に 導 かん。主よ、 爾 の名に依りて我を生  
たま なんぢ ぎ よ わ たましい くなん ひ いた たま なんぢ あわれみ もつ わ てき  
かし給え、 爾 の義に依りて我が 靈 を苦難より引き出し給え、 爾 の 憐 を以て我が敵を  
ほろぼ およ わ たましい せ もの たいら たま われ なんぢ ぼく  
滅し、凡そ我が 靈 を攻むる者を 夷 げ給え、我は 爾 の僕なればなり。

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみのぞ しゅてん おう かみちちぜんのうしゃ  
至 高 には光 榮 神に歸し、地には平安 降 り、人には 惠 臨めり。主天の王、神 父 全 能 者  
しゅどくせい こ およ せいしん なんぢ おおい こうえい よ われらなんぢ あが  
よ、主 獨 生の子イイススハリストス、及び聖 神よ、 爾 の 大 なる光 榮 に因りて、我等 爾 を崇  
なんぢ ほ あ なんぢ ふ おが なんぢ とうと うた なんぢ かんしゃ しゅかみ かみ こひつじ  
め、 爾 を讃め揚げ、 爾 を伏し拜み、 爾 を 尊 み歌い、 爾 に感謝す。主 神よ、神の 羔 、  
ちち こ よ つみ にな もの われら あわれ たま よ もろもろ つみ にな もの われら いのり  
父の子、世の罪を任いし者よ、我等を 憐 み給え、世の 諸 の罪を任いし者よ、我等の 禱 を  
い たま ちち みぎ ざ もの われら あわれ たま なんぢ ひとりせい なんぢ ひとりしゅ  
納れ給え。父の右に坐する者よ、我等を 憐 み給え。 爾 は 獨 聖 なり、 爾 は 獨 主 イイス  
かみちち こうえい あらわ もの  
スハリストス、神 父 の光 榮 を 顯 す者なればなり、アミン。

われやや なんぢ ほ あ なんぢ な よよ あが うた  
我 夜 夜に 爾 を讃め揚げ、 爾 の名を世に 崇 め歌わん。  
しゅ なんぢ よよわれら かくれが われかつ い しゅ われ あわれ わ たましい いや たま  
主よ、 爾 は世世我等の 避 所たり。我 曾 て言えり、主よ、我を 憐 み、我が 靈 を 醫 し給え、  
われつみ なんぢ え しゅ なんぢ はし つ なんぢ むね おこな われ おし たま なんぢ  
我 罪 を 爾 に得たればなり。主よ、 爾 に趨り附く、 爾 の旨を行 うを我に教え給え、 爾 は  
われ かみ いのち みなもと なんぢ あ われらなんぢ ひかり おい ひかり み あわれみ なんぢ し  
我の神、生命の 源 は 爾 に在ればなり、我等 爾 の光 に於て光 を觀ん。 憐 を 爾 を知る  
もの つね た たま  
者に恒に垂れ給え。

しゅ われ まも つみ こ よ わた たま しゅわ せんぞ かみ なんぢ あが ほ なんぢ  
主よ、我を守り罪なくして此の夜を度らせ給え。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ 爾

な よよ とうと うた  
の名は世々に 尊み歌わる、アミン。

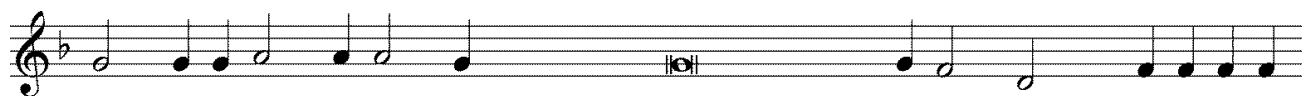
しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ なんぢ  
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給え。主よ、爾は崇め讃めらる、爾

いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと たま せい  
の誠を我に訓え給え。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ給え。聖な

もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま しゅ なんぢ あわれみ よよ あ  
る者よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給え。主よ、爾の憐は世々に在り、

なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ  
爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と

せいしん き いま いつ よよ  
聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。



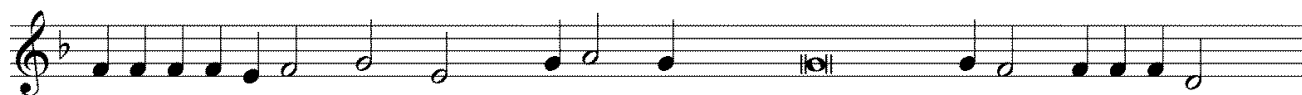
て んち は こ んに ち しよげんやと ともに たのしむべ し 、しよてんしと  
天 地 今 日 緒 預 言 者 偕 樂 し 緒 天 使



しゅうじんとは ぞくしんに いわうべ し 、けだしかみは どうていぢよ  
衆 人 屬 神 祝 し 蓋 神 童 貞 女



よりうま れて 、にくたいを もつてくらやみとかげとにぎするものに  
生 れて 、肉 體 を 以 幽 闇 蔭 とに 坐 する 者



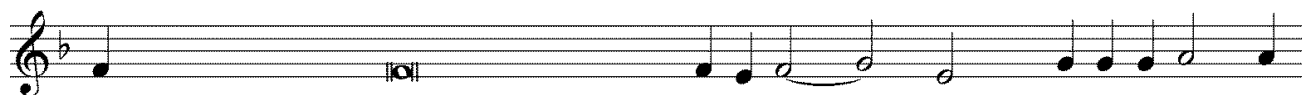
あらわれたま えり 。ほら およびかいはぶねはかれを受け、  
現 れ 給 え り 。洞 及 芻 槽 彼 受



ぼくしゃはきせきをつた え 、とうほうのはかせはヴィフレムに  
牧 者 奇 蹟 傳 え 東 方 博 士



れいもつをたづそ う。われらもふとうのくちをもち  
禮 物 攜 う。我 等 も 不 當 の 口 を 以

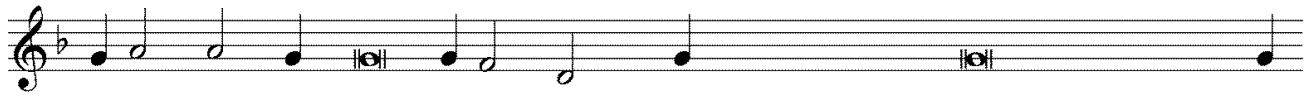


てんしのごとくほめうたをかれにたてまつ らん。いとたかき  
天 使 如 讃 歌 彼 奉 ら ん。至 高 き



にはこうえいかみにきし、ちにはへいあんくだれり、けだし  
光 榮 神 歸 し 地 平 安 降 り 蓋





しよみ んの のぞみはきた り、きたりてわれらをてきのどれいより  
緒民 望 来 来 我 等 敵 奴 隷



すくいたま えり。  
救 給

誦經) 今日ハリストス生れ給いしに、天と地とは合せられたり、今日神は地に降り、人は天に升れ

り、本性の見るべからざる者は、今日人の爲に肉體にて見らる。故に我等も彼を讚榮して籲

ばん、至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、蓋爾の降臨は之を賜えり。我が

救世主よ、光榮は爾に歸す。

至高きには光榮神に歸すと、今日我ヴィフレムに於て無形の者が平安を地に賜いし主

に歌うを聞く。今童貞女は天より廣し、蓋幽暗に在る者に光を輝かし、謙卑の者を高

くして、天使の如く歌わしむ、至高きに光榮は神に歸す。

イイスは像と肖とに形られたる者が犯罪に縁りて朽ちたるを見て、天を側けて下り、性

を易えずして、童貞女の腹に入り給えり、其内に於て、朽ちたるアダムを新にして、籲ばしめ

ん爲なり、我が贖罪主及び神よ、光榮は爾の顯見に歸すと。

光榮は父と子と聖神に歸す。

ペルシヤの王たる博士は明に天の王の地に生れしを知り、光れる星に導かれてヴィフレ

ムに至り、精選の禮物、黄金乳香没薬を獻げて、伏して拜めり、洞の中に無原なる赤子

の臥し給うを見ればなり。

今も何時も世々に。アミン。

今日ヴィフレムに生れし主救世者の爲に衆天使は天に在りて樂しみ、人人は歡び、

萬物は祝う、蓋凡の偶像の迷は熄みて、ハリストスは世々に王となり給えり。

司祭) 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し給え、慈憐と洪恩とを以て爾の世界

に臨み、正教のハリストティアノン等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給え、

至淨なる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤの禱と、生命を施す尊き

じゅうじか ちから むけい とうと てんぐん こうえい とうと よげんしゃ ぜんく じゅせん こうえい  
十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光榮に

さんび せいしと われら せいしんぶ せかい だいきょうし せいせいしゃ だい しんがくしゃ  
して讚美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ヴァシリイ、神學者グリゴ

きんこう われら せいしんぶ だいしゅきょう きせきしゃ われら せいしんぶ  
リイ、金口イオアン、我等の聖神父・ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・

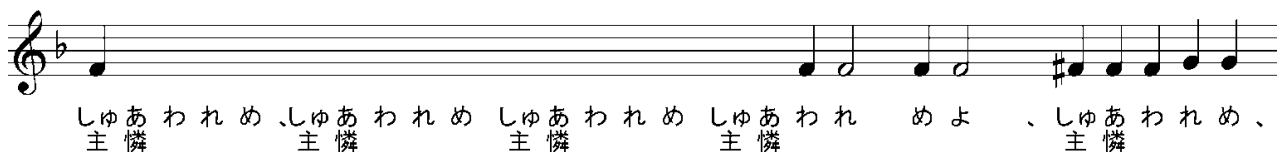
にほん あしと だいしゅきょう こうえい がいせん せいちめいしゃ こくしょうほうしん わ しよしんぶ  
日本の使徒・大主教ニコライ、光榮なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、

せい ぎ かみ そふぼ およ およ しよせいじん てんたつ よ だいじんじ しゅ  
聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の轉達に因りて、大仁慈の主よ、

なんぢ もと われら ざいにんなんぢ いの もの き い われら あわれ  
爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、



またわくに てんのうおよくに つかさどものためいの  
司祭) 又我が國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんたい  
司祭) 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の

だいしゅきょう およ お ことごと われら けいてい ため およ ゆうかんこんなん  
大主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲、凡そ憂患困難に

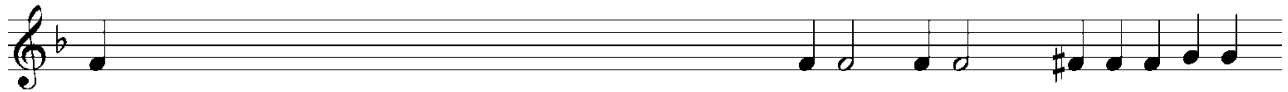
かみ あわれみ たすけ よう たましい ため こ せいどう つつし こ こ きた  
して神の憐と佑とを要するハリストティアニンの靈の爲、此の聖堂と慎みて此に来る

もの おお ため ぜんせかい あんわ せいせい ため かみ せい しよきょうかい けんりつ ため べんれい  
者とを蔭わんが爲、全世界の安和と整齊との爲、神の聖なる諸教會の堅立の爲、勉勵と

かみ おそ ころも つくろふくえき われら しょふけいてい たす すく ため さんばい え  
 神を畏る心とを以て劬勞服役する我等の諸父兄弟を助け救わんが爲、参拜するを得ざ  
 る者と他出する者との爲、病に臥す者を醫さんが爲、已に過ぎ去りし悉くの我等の父祖  
 けいてい こ ところ しょうほう ほうむ せいきょう もの あんみん かんゆう ふく きおく しょうざい しゃめん  
 兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の安眠・寛宥・福たる記憶・諸罪の赦免  
 ため とりこ もの すく ため つとめ と われら けいてい およ およ こ そんき せいどう  
 の爲、擲となりし者の救われんが爲、務を執る我等の兄弟、及び凡そ此の尊貴なる聖堂に  
 つと もの かつ つと もの ため いの い  
 務むる者と嘗て務めし者の爲に禱りて曰わん、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、  
 主 憐 主 憐 主 憐 主 憐

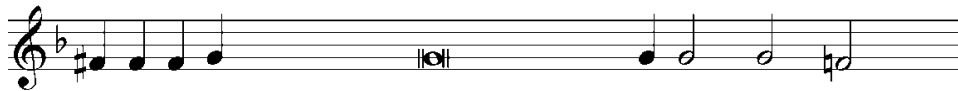


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、しゅあわれめ、  
 主 憐 主 憐 主 憐 主 憐 主 憐



しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐

またこ まち およそ まち ちほう ききん えきびょう ぢしん すいなん かなん けんなん がいこう ないらん  
 司祭) 又此の都邑と凡の都邑と地方が、饑饉・疫病・地震・水難・火難・劔難・外攻・内亂よ  
 り護られ、我が善にして人を愛する神が仁慈と哀憐とを垂れて、凡そ我等に望む怒を遏め、  
 そのわれら せま ぎ ばつ われら すく およ われら あわ ため いの  
 其我等に逼る義なる罰より我等を救い、及び我等を憐れむが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

またしゅ かみ われら つみ もの いのり こえ きい われら あわれ ため いの  
 司祭) 又主・神が我等罪なる者の禱の聲を聆き納れて、我等を憐むが爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

かみ わ きゆうせいしゅ ち しきよく とお うみ おもの たのみ われら きたま しゅさい われ  
 司祭) 神、我が救世主、地の四極と遠く海に居る者との恃よ、我等に聞き給え、主宰よ、我  
 ら つみ じんじ た じんじ た われら あわれ たま けだしなんぢ じんじ ひと あい かみ  
 等の罪に仁慈を垂れ、仁慈を垂れて我等を憐み給え、蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり、  
 われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
 我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



アミン。

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup>衆人に平安、



司祭) <sup>われら こうべ しゅ かが</sup>我等の首を主に屈めん、



司祭) <sup>しゅさいだいじんじ しゅ われら かみ しじょう われら ぢよさい しょうしんぢよ えいてい</sup>主宰大仁慈なる主イイススハリストス我等の神よ、至淨なる我等の女宰・生神女・永貞

<sup>どうぢよ いのり いのち ほどこ とうと じゅうじか ちから むけい とうと てんぐん こうえい とうと</sup>童女マリヤの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊

<sup>よげんしゃ ぜんく じゅせん こうえい さんび せいしと こうえい がいせん せいちめいしゃ</sup>き預言者・前駆・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、光榮なる凱旋の聖致命者、

<sup>こくしょうほうしん わ しよしんぶ せい ぎ かみ そふぼ およ およ なんぢ ことごと</sup>克肖捧神なる吾が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び爾が悉

<sup>せいじん きとう よ われら きとう き い われ ざいか ゆるし たま われら なんぢ つばさ</sup>くの聖人の祈禱に因りて、我等の祈禱を聆き納れ我等に罪過の赦を賜い、我等を爾が翼の

<sup>かげ おお もろもろ きゅうてき われら とお われら いのち へいあん たま しゅ われら</sup>蔭にて覆い、諸の仇敵を我等より遠ざけ、我等の生命を平安ならしめ給え、主よ、我等

<sup>なんぢ せかい あわれ ならび われら たましい すく たま なんぢ ぜん ひと あい しゅ</sup>と爾の世界とを憐み、并に我等の靈を救い給え、爾は善にして人を愛する主なれば

なり。



【 挿句讚頌 】

誦經) <sup>こんにちしだいしえい きせき おこな どうていぢょう う たい そこな ことば み と ちち</sup>今日至大至榮なる奇蹟は行われたり、童貞女は生みて胎は損われず、言は身を取りて父

<sup>はな しょてんし ぼくしゃ とも さんえい われら かれら とも よ いたか こうえいかみ き</sup>を離れず。諸天使は牧者と偕に讚榮し、我等も彼等と偕に籲ぶ、至高きには光榮神に歸し、

<sup>ち へいあんくだ</sup>地には平安降り。

<sup>われしのめ まえ はら なんぢ う しゅ ちか く</sup>我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓いて悔いず。

<sup>こんにちどうていぢょう ばんゆう ぞうせいしゅ う ほら たてまつ ほし くらやみ あ もの ひ</sup>今日童貞女は萬有の造成主を生む。エデムは洞を奉り、星は黒黯に在る者に日たる

<sup>しめ はかせ しん てら れいもつ けん ふくはい ぼくしゃ きせき み しょてんし さん</sup>ハリストスを示し、博士は信に照され、禮物を獻じて伏拜し、牧者は奇蹟を見、諸天使は讚

えい い いたか こうえいかみ き  
詠して曰う、至高きには光榮神に歸す。

しゅわ しゅ い なんぢわ みぎ ざ  
主我が主に謂えり、爾我が右に坐せよ。

しゅ うま とき ひがし はかせきた じんたい と かみ  
主イイススがイウデヤのヴィフレムに生れし時、東より博士來りて、人體を取りし神に  
ふくはい そのたからばこ ひら ねつしん とうと れいもつ けん そのよよ おう よ れんきん  
伏拜し、其寶盒を啓きて、熱心に貴き禮物を獻じたり、其世世の王たるに由りては鍊金  
ばんゆう かみ よ にゆうこう ふし みつか ししや よ もつやく ばんみんきた  
を、萬有の神たるに由りては乳香を、不死の三日の死者たるに由りては没薬を。萬民來りて、  
われら たましい すく ため うま たま しゅ ふくはい  
我等の靈を救わん爲に生れ給いし主に伏拜せん。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す。

イエルサリムよ、<sup>たの</sup>樂しめ、<sup>あい</sup>シオンを愛する者よ、<sup>もの</sup>皆祝え。今日<sup>みにわ</sup>アダムの定罪の久しき<sup>こんにち</sup>縲紲は釋  
かれ、<sup>らくえん</sup>樂園は我等の爲に啓かれ、<sup>へび</sup>蛇は虚しくせられたり、<sup>けだしそのさき いざな</sup>蓋其先に誘いし者が今造物主  
<sup>はは な</sup>の母と爲りしを見たり。<sup>み</sup>嗚呼<sup>ああふか</sup>深い哉<sup>かなかみ</sup>神の富と<sup>とみ</sup>智慧と<sup>ちえ</sup>知識や<sup>ちしき</sup>凡の肉身の爲に<sup>およそ</sup>死の縁由と爲りし  
<sup>もの</sup>者、<sup>つみ</sup>罪の器は、<sup>うつわ</sup>生神女に縁りて、<sup>しょうしんぢよ</sup>全世界の救の首と爲れり、<sup>ぜんせかい</sup>蓋<sup>すくい</sup>純全なる神は<sup>はじめ</sup>赤子と  
して<sup>な</sup>彼より<sup>なわめ</sup>生れ、<sup>と</sup>其生るるを以て<sup>おさなご</sup>童貞を<sup>もつ</sup>封印し、<sup>もつ</sup>襁褓を以て<sup>な</sup>罪の縛を<sup>な</sup>解き、<sup>と</sup>嬰兒たるを以  
て<sup>さんつう</sup>エヴァの産痛の患を<sup>うれい</sup>醫し<sup>いや</sup>給う。故に<sup>たま</sup>萬物は<sup>ゆえ</sup>祝いて<sup>ばんぶつ</sup>樂しむべし、<sup>いわ</sup>蓋<sup>たの</sup>ハリストスは<sup>けだし</sup>之を<sup>これ</sup>新  
にし、<sup>かつわれら</sup>且我等の<sup>たましい</sup>靈を<sup>すく</sup>救わん爲に<sup>きた</sup>來り<sup>たま</sup>給えり。

いま いつ よよ  
今も何時も世世に。アミン。

ハリストス神よ、<sup>かみ</sup>爾は<sup>なんぢ</sup>洞に入り<sup>ほら</sup>給えり、<sup>い</sup>蜀槽は<sup>たま</sup>爾を受け、<sup>かいばぶね</sup>牧者と<sup>なんぢ</sup>博士とは<sup>う</sup>伏拜せり。其  
<sup>ときしよ</sup>時諸預言者の<sup>よげんしゃ</sup>宣傳は<sup>せんでん</sup>應えり、<sup>かな</sup>天使の<sup>てんし</sup>軍は<sup>ぐん</sup>奇として<sup>ぎ</sup>籲びて<sup>よ</sup>曰えり、<sup>い</sup>獨人を<sup>ひとりひと</sup>愛する<sup>あい</sup>主よ、<sup>しゅ</sup>光榮  
<sup>なんぢ</sup>は<sup>かんよう</sup>爾の寛容に<sup>き</sup>歸す。

主<sup>しゅ</sup>宰よ、<sup>さい</sup>今<sup>いま</sup>爾の<sup>なんぢ</sup>言に<sup>ことば</sup>循いて、<sup>したが</sup>爾の<sup>なんぢ</sup>僕を<sup>ぼく</sup>釈し、<sup>ゆる</sup>安然として<sup>あんぜん</sup>逝か<sup>ゆ</sup>しむ。蓋<sup>けだしわ</sup>我が<sup>め</sup>目は<sup>なんぢ</sup>爾  
<sup>すくい</sup>の救を見たり。<sup>み</sup>爾が<sup>なんぢ</sup>萬民の<sup>ばんみん</sup>前に<sup>まえ</sup>備えし<sup>そな</sup>者なり、<sup>もの</sup>是れ<sup>こ</sup>異邦人を<sup>いほうじん</sup>照すの<sup>てら</sup>光、<sup>ひかり</sup>及び<sup>およ</sup>爾の<sup>なんぢ</sup>民イ  
ズライリの<sup>さかえ</sup>榮なり。

せい かみ せい せい ゆうき せい せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい せい ゆうき せい せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ

せい かみ せい せい ゆうき せい せい じょうせい もの われら あわれ  
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる せい  
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦せ。聖

もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ  
なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ  
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん おこな  
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行

わたるがごとく、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を

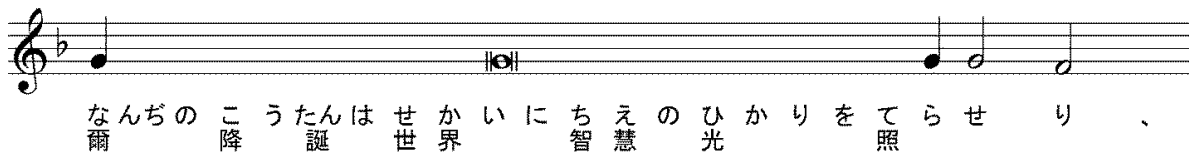
われらゆるごとく、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給

え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。

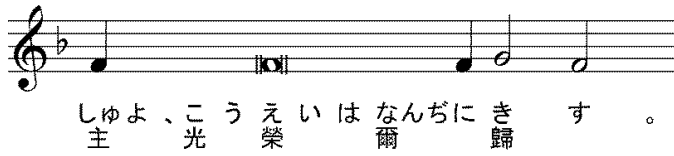


【 アポリテキオン 發放讚詞 】





なんぢのひをおが み、なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
爾 義 日 拝 爾 上 東 覚



しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸



ハリストスわがかみよ、  
我 神



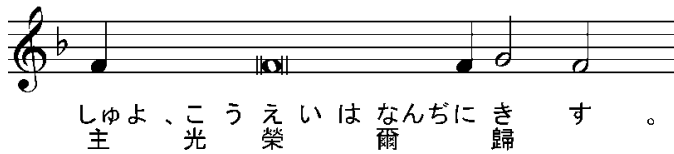
なんぢのこうたんはせかいにちえのひかりをてらせり、  
爾 降 誕 世 界 智 慧 光 照



これによりてほしにつとむるものはほしにおしえられて、  
此 由 星 勤 者 星 教



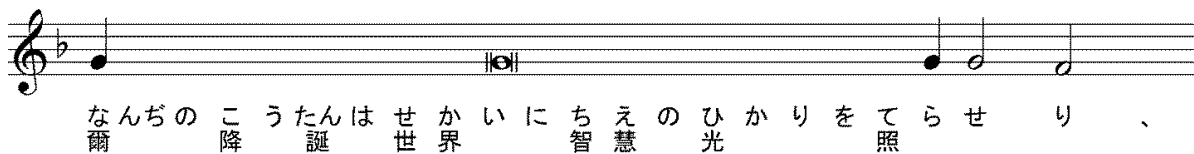
なんぢのひをおが み、なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
爾 義 日 拝 爾 上 東 覚



しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸



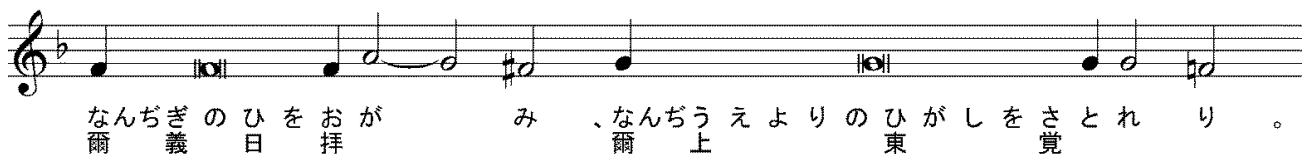
ハリストスわがかみよ、  
我 神



なんぢのこうたんはせかいにちえのひかりをてらせり、  
爾 降 誕 世 界 智 慧 光 照



これによりてほしにつとむるものはほしにおしえられて、  
此 由 星 勤 者 星 教



なんぢのひをおが み、なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
爾 義 日 拝 爾 上 東 覚



しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
主 光 榮 爾 歸 ず。

司祭) 主<sup>しゅ</sup> イイスス・ハリストス<sup>われら</sup> 我等の神<sup>かみ</sup>、五<sup>いつつ</sup> の餅<sup>パン</sup> に福<sup>ふく</sup> を降<sup>くだ</sup> して五千<sup>ごせん</sup> 人を飽<sup>あ</sup> かしめし者<sup>もの</sup> よ、爾<sup>なんぢ</sup> 親<sup>みづか</sup>

ら亦<sup>また</sup> 此<sup>こ</sup> の餅<sup>パン</sup> ・米<sup>こめ</sup> ・葡萄酒<sup>ぶどうしゅ</sup> ・油<sup>あぶら</sup> に福<sup>ふく</sup> を降<sup>くだ</sup> し、是<sup>これ</sup> を此<sup>こ</sup> の都<sup>まち</sup> 邑<sup>なんぢ</sup> と 爾<sup>ぜん</sup> の全<sup>せ</sup> 世界<sup>かい</sup> とに満<sup>み</sup> たし、及<sup>およ</sup> び之<sup>これ</sup>

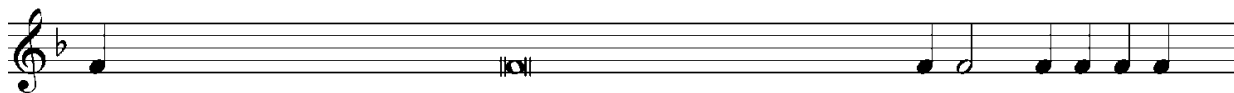
を領<sup>りょう</sup> 食<sup>しょく</sup> する者<sup>もの</sup> を聖<sup>せい</sup> にせよ、蓋<sup>けだし</sup> ハリストス<sup>われら</sup> 我等の神<sup>かみ</sup> よ、爾<sup>なんぢ</sup> は萬<sup>よろづ</sup> の物<sup>もの</sup> に福<sup>ふく</sup> を降<sup>くだ</sup> し、之<sup>これ</sup> を聖<sup>せい</sup>

にする主<sup>しゅ</sup> なり、我<sup>われら</sup> 等<sup>こう</sup> 光<sup>えい</sup> 榮<sup>なんぢ</sup> を 爾<sup>なんぢ</sup> と 爾<sup>むげん</sup> の無<sup>ちち</sup> 原<sup>しせい</sup> の父<sup>しぜん</sup> と至<sup>いのち</sup> 聖<sup>ほど</sup> 至<sup>なんぢ</sup> 善<sup>しん</sup> にして生命<sup>いのち</sup> を施<sup>ほ</sup> す 爾<sup>なんぢ</sup> の神<sup>しん</sup> とに

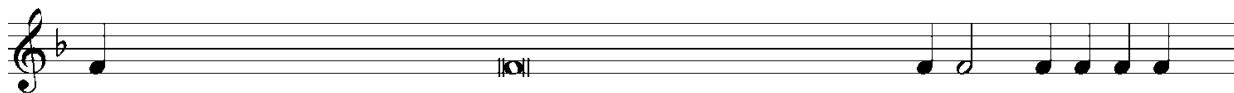
けん 獻<sup>いま</sup> ず、今<sup>いつ</sup> も何<sup>よ</sup> 時<sup>よ</sup> も世<sup>よ</sup> 世<sup>よ</sup> に、



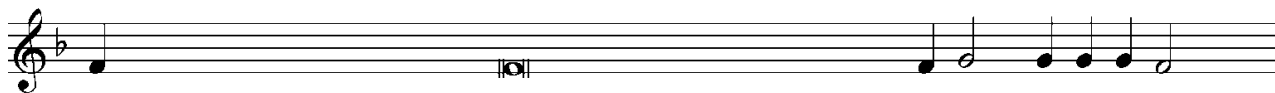
ア ミ ン。



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよりよよにいたらん。  
願 主 名 崇 讃 今 世 世 至



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよりよよにいたらん。  
願 主 名 崇 讃 今 世 世 至



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよりよよにいたらん。  
願 主 名 崇 讃 今 世 世 至

司祭) ねがわ<sup>しゅ</sup> くは主<sup>こう</sup> の降<sup>ふく</sup> 福<sup>その</sup> は其<sup>おん</sup> 恩<sup>ちよう</sup> 寵<sup>じん</sup> と仁<sup>あい</sup> 愛<sup>よ</sup> とに因<sup>つね</sup> りて恒<sup>なんぢ</sup> に 爾<sup>ら</sup> 等<sup>あ</sup> に在<sup>いま</sup> らん、今<sup>いつ</sup> も何<sup>よ</sup> 時<sup>よ</sup> も世<sup>よ</sup> 世<sup>よ</sup> に、



ア ミ ン。

【 早課 六段聖詠 (ただし前3段のみ) 】

誦經) いとたかき<sup>こう</sup> 高<sup>えい</sup> には光<sup>かみ</sup> 榮<sup>き</sup> 神<sup>ち</sup> に歸<sup>へい</sup> し、地<sup>あん</sup> には平<sup>くだ</sup> 安<sup>ひと</sup> 降<sup>めぐみ</sup> り、人<sup>の</sup> に 恵<sup>ぞ</sup> は臨<sup>め</sup> り。

いとたかき<sup>こう</sup> 高<sup>えい</sup> には光<sup>かみ</sup> 榮<sup>き</sup> 神<sup>ち</sup> に歸<sup>へい</sup> し、地<sup>あん</sup> には平<sup>くだ</sup> 安<sup>ひと</sup> 降<sup>めぐみ</sup> り、人<sup>の</sup> に 恵<sup>ぞ</sup> は臨<sup>め</sup> り。

いとたかき<sup>こう</sup> 高<sup>えい</sup> には光<sup>かみ</sup> 榮<sup>き</sup> 神<sup>ち</sup> に歸<sup>へい</sup> し、地<sup>あん</sup> には平<sup>くだ</sup> 安<sup>ひと</sup> 降<sup>めぐみ</sup> り、人<sup>の</sup> に 恵<sup>ぞ</sup> は臨<sup>め</sup> り。

しゅ わ<sup>く</sup> が 唇<sup>ちびる</sup> を 啓<sup>ひら</sup> けよ、然<sup>しか</sup> せば我<sup>わ</sup> が口<sup>くち</sup> は 爾<sup>なんぢ</sup> の 讚<sup>さん</sup> 美<sup>び</sup> を 揚<sup>あ</sup> げんとす。



しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ  
主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。

【 第3聖詠 】

しゅ わ てき なん おお おお もの われ せ おお もの わ たましい さ かれ かみ  
主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が靈を指して、彼は神よ  
すくい え ず い しか なんぢ しゅ なんぢ われ まも たて われ さかえ なんぢ わ こうべ  
り救を得ずと云う。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、私の榮えなり、爾は我が首を  
あ わ こえ もつ しゅ よ しゅ そのせいざん われ き たも われふ い またさ しゅ  
擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其聖山より我に聴き給う。我臥し、寝ね、又覺む、主は  
われ ふせ まも めぐ われ せ ばんみん われこれ おそ しゅ お わ かみ  
我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、  
われ すく たま けだしなんぢ わ しよてき ほほう う あくにん は くじ すくい しゅ よ なんぢ  
我を救い給え。蓋爾は我が諸敵の頬を批ち、悪人の齒を折けり。救は主に依る、爾の  
こうふく なんぢ たみ あ  
降福は爾の民に在り。

【 第37聖詠 】

しゅ なんぢ いきどおり もつ われ せ なか なんぢ いかり もつ われ ぼつ なか けだしなんぢ  
主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒りを以て我を罰する母れ、蓋爾  
や われ さ なんぢ て おも われ くわ なんぢ いかり よ わ にく いた ところ  
の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒りに依りて我が肉に傷まざる所なく、  
われ つみ よ わ ほね やす え けだしわ ふほう わ こうべ あふ おもに ごと われ あつ われ  
私の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を圧す、我  
の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂いて行く、蓋我が腰は熱  
なや わ にく いた ところ われちからおとろ いた つか わ ころろ さ かけ  
に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰えて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號  
ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦い栗  
き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見  
はな わ しんせき とお た わ いのち もと もの あみ もう われ そこな ほつ もの  
て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者  
わ ほろび い まいにちあ はかりごと たく しか われ みみしい ごと き おし ごと  
は我が淪亡のことを言いて、毎日悪しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、啞の如  
く己の口を啓かず、是に於いて我は聞かなく、其口に答うる所なき人の如くなれり、蓋  
しゅ われなんぢ たの しゅわ かみ なんぢき たま われい ねが てき われ か  
主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾聴き給わん。我言えり、願わくは敵は我に勝たざらん、  
わ あし つまづ とき かれら われ むか ほこ たか われほとん たお われ うれい つね わ  
我が足の踏く時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、私の憂は常に我が  
まえ あ われ わ ふほう みと わ つみ ため はなはだかなし わ てき い いやいよつよ ゆえ  
前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚哀む。我が敵は生きて愈強く、故な  
くして我を疾む者は益多し、悪を以て私の善に報ゆる者は、我が善に従うに因りて私の  
てき しゅわ かみ われ す なか われ とお なか しゅわれ きゆうしゅ すみやか きた  
敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主私の救主よ、速に來  
りて我を救い給え。

【 第62聖詠 】

かみ なんぢ われ かみ われあかつき なんぢ たず わ たましい かわ なんぢ のぞ わ み  
 神よ、爾は我の神なり。我 暁より爾を尋ぬ、我が 靈は渴きて爾を望み、我が身は  
 むな かわ みづ ち いた なんぢ した なんぢ ちから なんぢ こうえい み ため  
 空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕う、爾の能力と爾の光榮とを見ん爲なり、  
 わ かつ なんぢ せいしょ み ごと けだしなんぢ あわれみ いのち まさ わ くちなんぢ さんび か  
 我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是く  
 ごと われい ときなんぢ あが ほ なんぢ なよ わ て あ わ たましい あ  
 の如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を擧げん。我が 靈の飽かざること  
 あぶら もつ ごと わ くちよろこび こえ なんぢ さんび どこ なんぢ きおく やこう なんぢ  
 脂油を以てするが如く、我が口 歡の聲にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を  
 おも とき あ けだしなんぢ われ たすけ なんぢ つばさ かげ おい われよろこ わ たましい した  
 思う時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が 靈は親し  
 なんぢ つ なんぢ みぎ て われ たす か わ たましい そこな はか もの ち ふか ところ  
 く爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が 靈を害わんことを謀る者は地の深き處  
 くだ かれらやいば かか きつね えもの ただおう かみ ため たのし およ かれ もつ  
 に降らん、彼等刃に攫りて、狐の獲物とならん。惟王は神の爲に樂まん、凡そ彼を以て  
 ちか もの ほまれ え けだしつわり い もの くち ふさ  
 誓う者は譽を得ん、蓋 謊を言う者の口は塞がれんとす。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの  
 我等安和にして主に禱らん、



司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの  
 上より降る安和と我等が 靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの  
 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>こ せいどう およ しん つつし かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの</sup> 此の聖堂、及び信と慎みと神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんたい だい</sup> 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大  
<sup>しゅきょう しさい そんびん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん</sup>  
主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の  
<sup>ため しゅ いの</sup>  
爲に主に禱らん、



司祭) <sup>わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの</sup> 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの</sup> 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>きこうじゆんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの</sup> 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ かれら</sup> 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の  
<sup>すくい ため しゅ いの</sup>  
救の爲に主に禱らん、



司祭) <sup>われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの</sup> 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



司祭) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>おんちよう</sup>恩寵を以て、<sup>われら</sup>我等を<sup>たす</sup>助け<sup>すく</sup>救い<sup>あわれ</sup>憐み<sup>まも</sup>護れよ、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しせいしけつ</sup>至聖至潔にして<sup>いた</sup>至りて<sup>さんび</sup>讚美たる<sup>われら</sup>我等の<sup>こうえい</sup>光榮の<sup>ぢよさい</sup>女宰、<sup>しょうしんぢよ</sup>生神女、<sup>えいていどうぢよ</sup>永貞童女<sup>しよせいじん</sup>マリヤと、<sup>しよせいじん</sup>諸聖人

<sup>きおく</sup>を記憶して、<sup>われらおのれ</sup>我等己の<sup>みおよ</sup>身及び<sup>たがい</sup>互に<sup>おのおの</sup>各の<sup>み</sup>身を以て、<sup>もつ</sup>並に<sup>ならび</sup>悉くの<sup>ことごと</sup>我等の<sup>われら</sup>生命を以て、<sup>いのち</sup>ハリ

<sup>かみ</sup>ストス神に<sup>いたく</sup>委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) <sup>けだしおよ</sup>蓋凡そ<sup>こうえいそんきふくはい</sup>光榮尊貴<sup>なんぢちち</sup>伏拜は<sup>こ</sup>爾父と<sup>せいしん</sup>子と<sup>き</sup>聖神に<sup>いま</sup>歸す、<sup>いつ</sup>今も<sup>よよ</sup>何時も<sup>よよ</sup>世世に、



ア ミ ン。

【 主は神なり (第117 聖詠) 】

司祭) <sup>しゅ</sup>主は<sup>かみ</sup>神なり<sup>われら</sup>我等を<sup>てら</sup>照せり、<sup>しゅ</sup>主の名に<sup>な</sup>依て<sup>きた</sup>來る<sup>もの</sup>者は<sup>あがめほ</sup>崇讚<sup>めらる</sup>めらる、



しゅ は か み な り、 わ れ ら を て ら せ り、 しゅ の な に よ っ て き た る  
主 神 我 等 照 主 名 依 來



も の は、 あ が め ほ め ら る。  
者 崇 讚

司祭) <sup>しゅ</sup>主を<sup>とおと</sup>尊<sup>ほ</sup>み<sup>かれ</sup>讚<sup>じんじ</sup>めよ、<sup>そのあわれみ</sup>彼は<sup>よよ</sup>仁慈にして<sup>よよ</sup>其憐は<sup>よよ</sup>世世に<sup>よよ</sup>あればなり、



しゅ は か み な り、 わ れ ら を て ら せ り、 しゅ の な に よ っ て き た る  
主 神 我 等 照 主 名 依 來



も の は、 あ が め ほ め ら る。  
者 崇 讚

司祭) <sup>かれらわれ</sup>彼等我を<sup>かこ</sup>圍み<sup>われ</sup>我を<sup>めぐ</sup>環れども、<sup>われしゅ</sup>我主の名を以て<sup>な</sup>之を<sup>もつ</sup>敗れり、<sup>これ</sup>之を<sup>やぶ</sup>敗れり、

しゅは かみなり、われらを てらせ り、しゅの なによつてきた る  
主 神 我 等 照 主 名 依 來

もの は、あ が め ほ め ら る。  
者 崇 讃

司祭) われし <sup>なおい</sup> 猶 <sup>しゅ</sup> 生 <sup>おこな</sup> きて <sup>ところ</sup> 主 <sup>つた</sup> の 行 <sup>た</sup> う 所 <sup>た</sup> を 傳 <sup>た</sup> えん、

しゅは かみなり、われらを てらせ り、しゅの なによつてきた る  
主 神 我 等 照 主 名 依 來

もの は、あ が め ほ め ら る。  
者 崇 讃

司祭) こう <sup>す</sup> し <sup>ところ</sup> 工 <sup>いし</sup> 師 <sup>おくぐう</sup> が 棄 <sup>しゅせき</sup> て し 所 <sup>これしゅ</sup> の 石 <sup>ところ</sup> は 屋 <sup>われら</sup> 隅 <sup>め</sup> の 首 <sup>きい</sup> 石 <sup>きい</sup> と なれり、是 <sup>きい</sup> 主 <sup>きい</sup> の な <sup>きい</sup> す 所 <sup>きい</sup> に して 我 <sup>きい</sup> 等 <sup>きい</sup> の 目 <sup>きい</sup> に 奇 <sup>きい</sup> 異 <sup>きい</sup> な り とす、

【 アポリテイクオン 發放讃詞 】

ハリス <sup>わ</sup> ス <sup>が</sup> わ <sup>か</sup> が <sup>み</sup> 神 <sup>よ</sup> 、

なん <sup>ち</sup> ぢ <sup>の</sup> の <sup>こ</sup> う <sup>たん</sup> 降 <sup>は</sup> 誕 <sup>せ</sup> 世 <sup>か</sup> 界 <sup>い</sup> に <sup>ち</sup> え <sup>の</sup> 智 <sup>ひ</sup> 慧 <sup>か</sup> り <sup>を</sup> を <sup>て</sup> ら <sup>せ</sup> り、  
爾 降 誕 世 界 智 慧 光 照

こ <sup>れ</sup> に <sup>よ</sup> り <sup>て</sup> ほ <sup>し</sup> に <sup>つ</sup> と <sup>む</sup> る <sup>も</sup> の <sup>は</sup> ほ <sup>し</sup> に <sup>お</sup> し <sup>え</sup> ら <sup>れ</sup> て、  
此 由 星 勤 者 星 教

なん <sup>ぢ</sup> ぢ <sup>の</sup> の <sup>ひ</sup> を <sup>お</sup> が <sup>み</sup> 神 <sup>よ</sup> 、なん <sup>ぢ</sup> ぢ <sup>の</sup> の <sup>ひ</sup> が <sup>し</sup> を <sup>さ</sup> と <sup>れ</sup> り。  
爾 義 日 拜 爾 上 東 覺

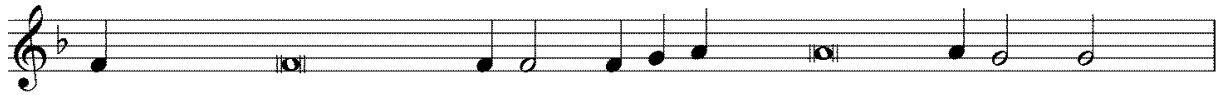
しゅ <sup>よ</sup>、こ <sup>う</sup> え <sup>い</sup> は <sup>なん</sup> ぢ <sup>に</sup> き <sup>す</sup> す。  
主 光 榮 爾 歸

【 ポリエレイ (第134聖詠) 】

しゅ <sup>の</sup> な <sup>を</sup> を <sup>ほ</sup> め <sup>あ</sup> げ <sup>よ</sup>、しゅ <sup>の</sup> し <sup>よ</sup> ぼ <sup>く</sup> や、ほ <sup>め</sup> あ <sup>げ</sup> よ、  
主 名 を 讃 揚 主 諸 僕 を 讃 揚



ア リル イヤ、 アリルイヤ 、 アリル イヤ 。



イエ ル サ リ ム に ま し ま す の し ヅ は シ オ ン に あ が め ほ め ら る 。

在 主 崇 讚



ア リル イヤ、 アリルイヤ 、 アリル イヤ 。



し ヅ を と お と み ほ め よ 、 アリルイヤ、 アリルイヤ 。

主 尊 讚



か れ は じ ん じ に し て そ の あ わ れ み は よ よ に あ れ ば な り 、 アリルイヤ 。

彼 仁 慈 其 憐 世 世 在



て ん の か み を と お と み ほ め よ 、 アリルイヤ、 アリルイヤ 。

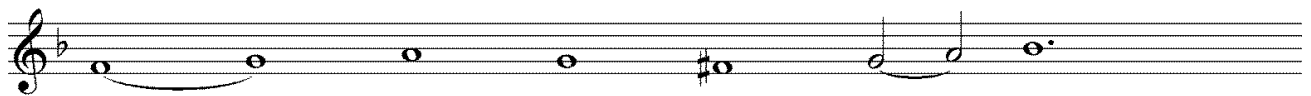
天 神 尊 讚



そ の あ わ れ み は よ よ に あ れ ば な り 、 アリルイヤ 。

其 憐 世 世 在

【 讚歌 】

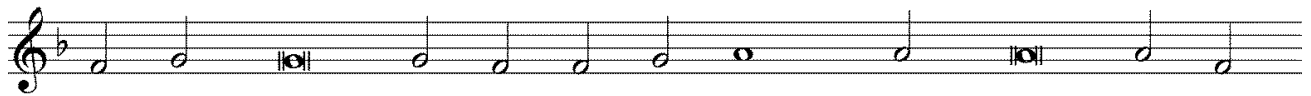


い 生 の ち 命 を た 賜 も う



ハ リ ス ト ス や 、 わ れ ら は な ん ぢ

我 等 爾 子



い ま と 嫁 つ が ざ る し じ ゅ う の ど う て い

今 至 淨 童 貞



ぢ ゃ マ リ ヤ よ り 、 わ れ ら の た め に

女 等 の 爲 へ

み 身 に て う ま れ た 給 ま い し しゅ 主 を  
あ 崇 が め ほ 讚 む 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。

司祭) かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ しよせいじん  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリ

ストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。

司祭) けだしなんぢちち こ せいしん な さんよう なんぢ くに さんえい いま いつ よよ  
蓋爾父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の國は讚榮せらる、今も何時も世に、

ア ミ ン 。

【 ステペンナ (第128 聖詠) 】

誦經) わ いとけな とき おお よく われ せ わ きゆうせいしゅ なんぢみづか われ まも すく たま  
我が幼き時より多くの愆は我を攻む、吾が救世主よ、爾親ら我を守りて救い給え。

シオンを惡む者は主より辱を受けよ、爾等草の火に於けるが如く枯らされんとすればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

せいしん およ たましい い きよき もつ いやいよのほ さんい いたい おうみつ てら  
聖神にて凡その靈は活かされ、清淨を以て愈上り、三位の一體にて奥密に照さる。

プロキメン  
【 提 綱 】

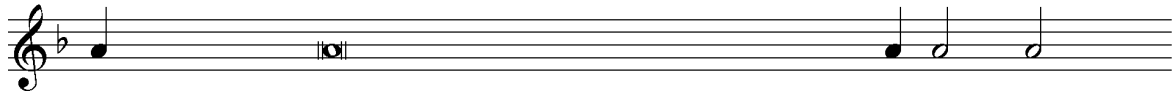
司祭) 慎<sup>つつし</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし、

司祭) 衆<sup>しゅうじん</sup>人<sup>へいあん</sup>に平安、



なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) 睿智、プロキメン、我黎明の前に腹より爾<sup>なんぢ</sup>を生<sup>う</sup>めり、主は誓<sup>しゅ</sup>いて悔<sup>ちか</sup>いず、

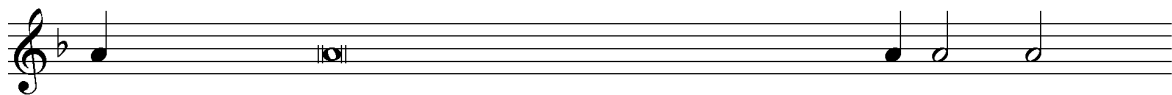


われしのめのまえにはらよりなんぢをうめり、  
我 黎 明 前 腹 爾 生



しゅちかいてくいず。  
主 誓 悔

司祭) 主、我が主に謂<sup>しゅ</sup>えり、爾<sup>しゅ</sup>我が右<sup>い</sup>に座<sup>なんぢ</sup>して我が爾<sup>わ</sup>の敵<sup>なんぢ</sup>を爾<sup>てき</sup>の足<sup>なんぢ</sup>の凳<sup>あし</sup>と爲<sup>だい</sup>すに至<sup>な</sup>れ、



われしのめのまえにはらよりなんぢをうめり、  
我 黎 明 前 腹 爾 生



しゅちかいてくいず。  
主 誓 悔

司祭) 我黎明の前に腹より爾<sup>なんぢ</sup>を生<sup>う</sup>めり、



しゅちかいてくいず。  
主 誓 悔

司祭) 主に禱<sup>しゅ</sup>らん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 蓋<sup>けだしわ</sup>我が神<sup>かみ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>は聖<sup>せい</sup>にして聖<sup>せい</sup>なる者<sup>もの</sup>の中<sup>うち</sup>に居<sup>お</sup>る、我等<sup>われら</sup>光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>父<sup>ちち</sup>と子<sup>こ</sup>と聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>に獻<sup>けん</sup>ず、

いまいつよよ  
今も何時も世世に、





司祭) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、



およそいきあるものはしゅをほめあげよ。  
凡呼吸者主讃揚

司祭) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、



およそいきあるものはしゅをほめあげよ。  
凡呼吸者主讃揚

司祭) 凡そ呼吸ある者は、



しゅをほめあげよ。  
主讃揚

【 福音經 (マトフェイ福音1章18~25節) 】

司祭) 睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭) 衆人に平安、



なんぢのしんにも。  
爾の神に

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよこうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。  
主よ光榮いはなんぢに歸し、光榮いはなんぢに歸す。

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) イススハリストスの生まるること左の如し、其母マリヤ、イオシフに聘せられて、未だ婚せざる先

に、聖神に由りて孕めること見れたり。その夫イオシフは義人にして、之を顯にせんことを欲せ

ず、私に彼を離さんことを望めり。

しかれども此の事を思える時、視よ、主の使夢に彼に現れて曰えり、ダヴィドの子イオシフよ、爾

つま い おそ なか けだしそのうち はら もの せいしん よ かれ こ う  
の妻マリヤを納るることを懼るる勿れ、蓋 其内に孕まれし者は聖神に由るなり、彼は子を生まん、

なんぢそのな な かれそのたみ そのつみ すく  
爾 其名をイイスと名づけん、彼其民を其罪より救わんとすればなり。

およ こ こと な しゅ よげんしゃ も い ところ かな いた いわ み どうぢよはら こ  
凡そ此の事の成りしは、主が預言者を以て言いし所に應うを致す、曰く、視よ、童女孕みて子を  
う 生まん、其名はエムヌイルと稱えられん、譯すれば神我等と偕にするなり。

ねむり お しゅ つかい かれ めい ごと おこな そのつま い ただいま しつ おな  
イオシフ 寐より起きて、主の使の彼に命ぜし如く行い、其妻を納れたり。惟未だ室を同じく  
そのちようし う およ すなわちそのな な  
せざるに、其冢子を生むに迨べり、則 其名をイイスと名づけたり。

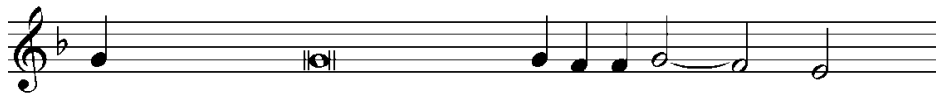
しゅ よ こう え い は なんぢに き し、こう え い は なんぢに き す。

【 第50聖詠 】

かみ なんぢ おおい あわれみ よ われ あわれ なんぢ めぐみ おお よ われ ふほう け たま  
誦經) 神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給  
え。 しばしばわれ わ ふほう あら われ わ つみ きよ たま けだしわれ わ ふほう し われ つみ  
屢 我を我が不法より洗い、我を我が罪より清め給え、蓋 我は我が不法を知る、私の罪  
つね わ まえ あ われ なんぢひとりなんぢ つみ おか あく なんぢ め まえ おこな なんぢ なんぢ  
は常に我が前に在り。我は爾 獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行えり、爾は爾  
しんだん ぎ なんぢ さいばん おおやけ み われ ふほう おい はら わ はは つみ おい  
の審断に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て  
われ う めり み なんぢ ころろ しんじつ あい わ うち おい ちえ われ あらわ  
我を生めり。視よ、爾は心に眞實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。ヒソブ  
もつ われ そそ しか われいさぎよ われ あら しか われゆき しろ われ よろこび  
を以て我に沃げ、然せば我 潔くならん、我を滌え、然せば我雪より白くならん。我に喜  
たのしみ き たま しか なんぢ お ほね よろこ なんぢ かんばせ わ つみ さ わ  
と 樂とを聞かせ給え、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我  
ことごと ふほう け たま かみ いさぎよ ころろ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま  
が 盡くの不法を抹し給え。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を私の衷に改め給  
え。 我を爾の顔より逐うこと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐる事母れ。爾が救の  
よろこび われ かえ しゅさい しん もつ われ かた たま われふほう もの なんぢ みち おし ふけん  
喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給え。我不法の者に爾の道を教えん、不虔  
もの なんぢ かえ かみ わ すくい かみ われ ち すく たま しか わ した なんぢ  
の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は爾の  
ぎ ほ あ しゅ わ くちびる ひら しか わ くち なんぢ さんび あ けだしなんぢ まつり  
義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋 爾は祭を  
ほつ ほつ われこれ たてまつ なんぢ やきまつり よろこ かみ よろこ まつり つうかい たましい  
欲せず、欲せば我此を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈  
なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給わず。主よ、爾の恵に因りて恩をシ

オンに<sup>た</sup>垂れ、イエルサリムの<sup>じょうえん</sup>城垣<sup>た</sup>を<sup>たま</sup>建て<sup>そのとき</sup>給え。其時に<sup>なんぢぎ</sup>爾義<sup>まつり</sup>の祭、<sup>ささげもの</sup>獻物と<sup>やきまつり</sup>燔祭とを<sup>よろこ</sup>喜び

う<sup>そのとき</sup>饗<sup>ひとびとなんぢ</sup>けん、其時に<sup>さいだん</sup>人人<sup>こうし</sup>爾の祭壇<sup>そな</sup>に<sup>そな</sup>犢<sup>そな</sup>を<sup>そな</sup>奠えんとす。



こうえいはちちとことせいしんにきす。  
光 榮 父 子 と 聖 神 に 歸 す。



ばんゆうはこんにちよろこびにみてる、ハリストスはどうていぢよよ  
萬有 今日 歎 喜 満 る、ハリストスは童 貞 女



りうま れたま えり。  
生 れ た 給 え り。



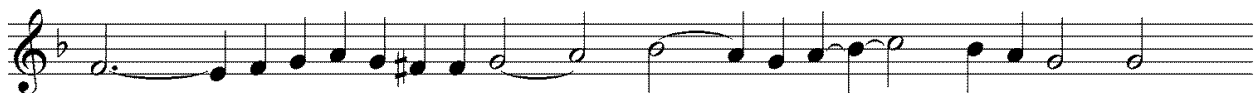
いまもいつもよよに、アミン。  
今 も 何 時 世 世 に、ア ミ ン。



ばんゆうはこんにちよろこびにみてる、ハリストスはヴィフレエムにう生  
萬有 今日 歎 喜 満 る、ハリストスはヴィフレエムに 生



ま れたま えり。  
ま れ た 給 え り。



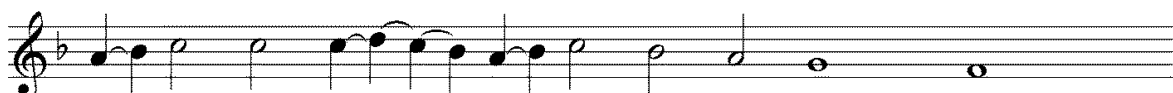
いとたかきにはこうえいかみにきし、  
至 と た か き に は 光 う 榮 い か み に き し、



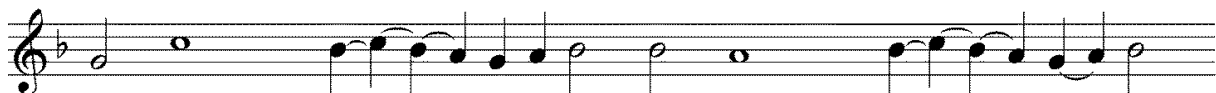
ちにはへいあんくだり、いま  
地 に は へ 平 い あ ん く だ り、い 今 ま



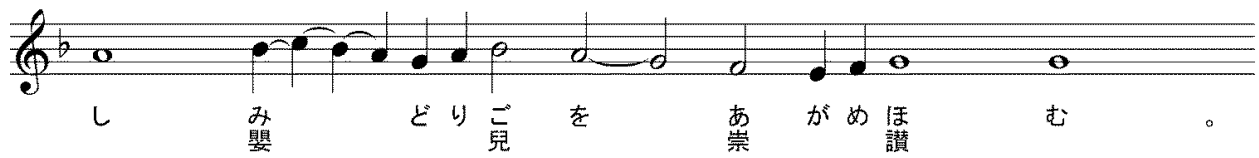
ヴィフレエムはつねにちちと  
ヴィ フ レ エ ム は つ 常 ね に ち 父 ち と



ともにごさするしゅをうく、  
と も に ご さ す る し ゅ を う く、



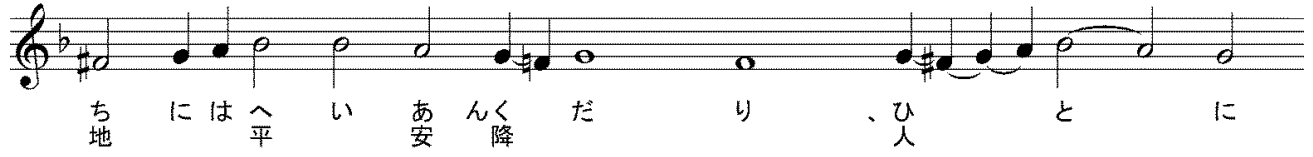
いまてんのつかいら等う生まれ  
い 今 ま て 天 の つ か い ら 等 う ま れ



し みどりごを あがめほむ。



いとたかきにはこ光 うえい かみにきし、



ちにはへい あんくだり、ひとに



めぐみはのぞめり。

司祭) <sup>なんぢ</sup>爾 <sup>どくせいし</sup>が <sup>じんじ</sup>獨生子の <sup>じれん</sup>仁慈と <sup>じんあい</sup>慈憐と <sup>よ</sup>仁愛とに <sup>なんぢ</sup>因りてなり、<sup>かれ</sup>爾 <sup>しせいしぜん</sup>は彼と <sup>いのち</sup>至聖 <sup>ほどこ</sup>至善にして <sup>なんぢ</sup>生命を <sup>なんぢ</sup>施す 爾

<sup>しん</sup>の <sup>とも</sup>神と <sup>さんよう</sup>偕に <sup>いま</sup>讚揚 <sup>いつ</sup>せらる、<sup>よよ</sup>今も何時も <sup>よよ</sup>世々に、



アミン。

【カノン 規程】



ハリストスうま る、あがめほめよ ハリストス てんよりす、むかえよ、



ハリスト スちにあ りあがれよ、ち こぞつてしゅ にうたえよ、ひと



びと や たのしんであがめほめよ、その こうえいはかがや けば



なり。

誦經) <sup>ひと</sup>ハリストスは <sup>な</sup>人と <sup>いぜん</sup>爲りて、<sup>かみ</sup>依然として <sup>かみ</sup>神なり。

<sup>もとかみ</sup>原 <sup>かたど</sup>神に <sup>つく</sup>像りて <sup>つみ</sup>造られ、<sup>よ</sup>罪に <sup>くさ</sup>由りて <sup>まつた</sup>腐れ、<sup>やぶれ</sup>全 <sup>したが</sup>く <sup>いとうるわ</sup>朽壊に <sup>しんせい</sup>従 <sup>いのち</sup>いて、<sup>いのち</sup>最 <sup>いのち</sup>美 <sup>いのち</sup>しき <sup>いのち</sup>神 <sup>いのち</sup>聖 <sup>いのち</sup>なる <sup>いのち</sup>生命 <sup>いのち</sup>を

<sup>うしな</sup>失 <sup>もの</sup>い <sup>えいち</sup>し <sup>ぞうせいしゅ</sup>者 <sup>あらた</sup>を、<sup>つく</sup>睿 <sup>たま</sup>智 <sup>かれ</sup>なる <sup>こうえい</sup>造 <sup>あらわ</sup>成 <sup>あらわ</sup>主 <sup>あらわ</sup>は <sup>あらわ</sup>改 <sup>あらわ</sup>め <sup>あらわ</sup>造 <sup>あらわ</sup>り <sup>あらわ</sup>給 <sup>あらわ</sup>う、<sup>あらわ</sup>彼 <sup>あらわ</sup>光 <sup>あらわ</sup>榮 <sup>あらわ</sup>を <sup>あらわ</sup>顯 <sup>あらわ</sup>した <sup>あらわ</sup>れば <sup>あらわ</sup>なり。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

造物主は其手にて造りし人の亡ぶるを見て、天を傾けて降り、神聖なる潔き童貞女

より實に身を取りて、人の全性を活かし給う、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

睿智と言と能力、父の子及び光なるハリストス神は、天上又地上の有能者に奥密を

顯さずして人と爲りて、我等を新にし給えり、彼光榮を顯したればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、

聖にせられし腹、明に焚けざる棘にて預象せられし者は神言を生めり。彼は己に人

の像を受けて、エヴァの難みたる腹を古の苦しき詛より解き給う。我等地上の者は彼を

讚榮す。

今も何時も世世に。アミン。

爾日の先より在す言、罪を滅さん爲に來り、卑しき洞に於て其慈憐に因りて襁褓に裹

まれたる者を、星は明に博士に示しに、彼等喜びて、之を人及び主として見たり。

ハリストスうま 生 る、あがめほめよ 崇 讚 ハリストステ 天 んよりす、むかえよ、 迎

ハリスト スちに あ りあ が れ よ、ち こぞつてしゆ にうたえよ、ひと 地 在 上 地 拳 主 歌 人

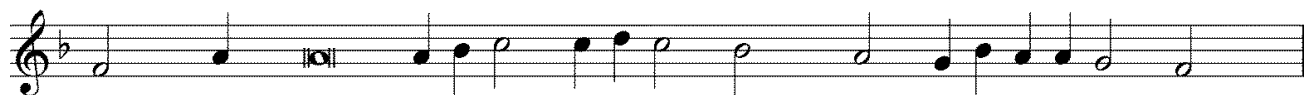
びと や たのしんであがめほめよ、そのこうえいはかがやけば 人 樂 崇 讚 光 榮 は 輝

な り。

よのなきさ前 き、ちち よりくちざるのせいをうけしこ、 世 無 前 父 朽 生 受 子



いま しょぢよ より た ね なくして み を う け し ハリス スか み に よ  
今 處 女 り 種 無 く 身 を 受 し ハリス スか み に よ



ば ん。わ が ぐ ら い を た こ う せ し し ゅ や 、 な ん ぢ は せ い な り 。  
我 位 高 主 爾 聖 なる

誦經) ハリスツスは人と爲りて、依然として神なり。

う え い き あ づ か つ ち お ん な い ざ い た め く さ れ し た が も の  
上 よ り の 吹 嘘 に 與 り た る 土 の ア ダ ム、 女 の 誘 の 爲 に 朽 壊 に 従 い し 者 は、 ハ リ ス ツ ス が

お ん な う ま み よ わ た め わ れ に も の な し ゅ な ん ぢ せ い  
女 更 生 る を 見 て 顛 ぶ、 吾 が 爲 に 我 に 似 た る 者 と 爲 り し 主 よ、 爾 は 聖 なる。

ハリスツスは人と爲りて、依然として神なり。

く や す ひ く ご う せ い あ づ か そ の う い や み か み せ い あ わ ひ と な か み  
朽 ち 易 く し て 低 き 合 成 に 與 り て、 其 受 け た る 賤 し き 身 に 神 の 性 を 合 せ、 人 と 爲 り て 神 た る

う し な わ れ ら つ の た か し ゅ な ん ぢ せ い  
を 失 わ ず し て、 我 等 の 角 を 高 く せ し ハ リ ス ツ ス 主 よ、 爾 は 聖 なる。

ハリスツスは人と爲りて、依然として神なり。

ヴィ フ レ エ ム、 イ ウ ダ の 諸 侯 の 王 城 よ、 樂 し め、 蓋 イ ズ ラ イ リ の 牧 者、 ヘ ル ヴ ィ ム の 肩 に 在

し ゅ あ ら わ な ん ぢ い わ れ ら つ の た か も の ば ん し ゅ う お う な  
る 主 ハ リ ス ツ ス、 顯 に 爾 更 出 で て 我 等 の 角 を 高 く せ し 者 は 萬 衆 の 王 と 爲 れ り。

こ う え い ち ち こ せ い し ん き  
光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、

ふ え ふ か い い た い さ ぎ よ よ め ち え こ し ふ く さ ん た ね じ ん たい と  
笛 を 吹 く 會 は 至 り て 潔 き 聘 女 の 智 慧 に 超 ゆ る 至 福 なる 産 と、 種 なく 人 體 を 取 り し ハ リ ス ツ

お う う た む け い ぐ ん み お ん え つ ね お ど ろ  
ス 王 を 歌 う 無 形 の 軍 と を 見 る 恩 を 獲 て、 常 な ら ず 驚 き た り。

い ま い つ よ よ  
今 も 何 時 も 世 世 に。 ア ミ ン。

て ん た か お う こ と ば そ の じ れ ん も つ わ れ ら た め よ め し ゅ う ぢ よ よ き た は じ め  
天 の 高 き に 王 た る 言 は、 其 慈 憐 を 以 て 我 等 の 爲 に 聘 女 な ら ぬ 少 女 に 由 り て 來 り、 始 よ

か た ち も の す え ひ お い に く た い き た ま お ち い し ゅ ぞ う も の お の れ つ た め  
り 形 な き 者 に し て、 季 の 日 に 於 て 肉 體 を 衣 給 え り、 陥 り し 初 造 の 者 を 己 に 就 か し め ん 爲

なり。



よ の な き さ き 、 ち ち よ り く ち ぎ る の せ い を う け し こ 、  
世 無 さ 前 き、 父 更 朽 ち ぎ る の 生 を 受 し 子、



い ま しょぢよ より た ね なくして み を う け し ハリス スか み に よ  
今 處 女 り 種 無 く 身 を 受 し ハリス スか み に よ



ば ん。わ が く ら い を た こ う せ し し ゅ や 、 な ん ぢ は せ い な り 。  
我 位 高 主 爾 聖

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
我等復又安和にして主に禱らん、



しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) しせいしけつ いた きんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ しよせいじん  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

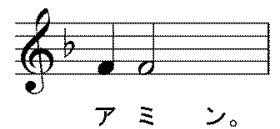
きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ  
を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリ

かみ いたく  
ストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) けだしなんぢちち こ せいしん な きんよう なんぢ くに きんえい いま いつ よよ  
蓋爾父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の國は讚榮せらる、今も何時も世に、



ア ミ ン。

【 應答歌 第8調 】

誦經) てん ほし もつ はかせ め なんぢかいばぶね ふ たま おさなご いほうみん はつもの たてまつ かれ  
天は星を以て博士を召して、爾芻槽に臥し給う嬰兒に異邦民の初物を獻れり。彼

ら おどろ もの けんべい ほうざ あら しごく ひんきゆう けだしなにももの ほら いや  
等を驚かしし者は權柄と寶座とに非ずして、至極の貧窮なり、蓋何物が洞より賤しき、

なにもの むつき いやし これら うち なんぢ しんせい とみ かがや しゅ こうえい なんぢ き  
何物が襦袢より卑き、是等の内に爾の神性の富は輝けり。主よ、光榮は爾に歸す。



さんびた りリスト スヤ 、 なんぢイエッセ イのね よりいでたるえだ 、  
讚美 爾 の 根 出 枝

およびそのはなとして しょぢよ よりうまれ り、かたちなきもの  
及 其 花 處 女 生 形 ち な き も の

かつか みや、なんぢおつとにゆかざるものよりみ身をうけて、  
且 神 爾 夫 適 者 の よ り み 身 を う け て、

かのしげりたるやまよりきたりしものなり、しゅや、なんぢ  
繁 山 來 者 主 爾

のちからをさんよ うす。  
力 讚 揚

誦經) ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

むかし イアコフの預言して、萬民の俟つ所の者と名づけしハリストスよ、  
昔 雅各の預言して、萬民の俟つ所の者と名づけしハリストスよ、  
なんぢはイウダの族より  
かがやいきた けん ぶんどり うば まよい か かがみ かな おしえ た  
輝き出で、來りて、ダマスクの權とサマリヤの擒物とを奪い、迷に代えて、神に適う教を立  
たま しゅ こうえい なんぢ ちから き  
て給えり。主よ、光榮は爾の力に歸す。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

しゅさい なんぢ い ほし ひか いにしえ よげんしゃ ことば まも ほし  
主宰よ、爾はイアコフより出づる星として光り、古の預言者ヴァラアムの言を守りて星  
まな ちしゃ いほうみん はつもの なんぢ みちび もの よろこび み あきらか かれら う  
を学ぶ知者、異邦民の初物として爾に導かれたる者を悦に充てて、明に彼等を受け  
たま しゅ こうえい なんぢ ちから き  
給えり。主よ、光榮は爾の力に歸す。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

なんぢ どうていちよ はら くだ あめ ひつじ け くだ ごと したたり ち お  
ハリストスよ、爾は童貞女の腹に降りしこと、雨が羊の毛に降るが如く、點滴が地に墜つ  
ごと きゅうせいしゅ しょうとう ぜんち  
るが如し。救世主よ、エフィオピヤとファルスス、アラヴィヤの諸島とミディヤのサヴァ、全地に  
けん と もの なんぢ ふふく しゅ こうえい なんぢ ちから き  
權を執る者は爾に俯伏せり。主よ、光榮は爾の力に歸す。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

しじょうしゃ なんぢ あまん どうていちよ にくたい と へび かしら どく きよ ため ひとひと  
至上者よ、爾は甘じて童貞女より肉體を取りて、蛇の首の毒を潔めん爲に人人と  
ひと もの きた かみ よ しゅうじん くら もん いのち ほどこ ひかり みちび たま  
侘しき者として來り、神たるに因りて衆人を暗き門より生を施す光に導き給う。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、



いにしえ きゆうかい しづ しよみん きやうてき がいのが よ て う ほめうた もつ ゆい  
古 より 朽 壊 に 沈みたる 諸 民 は 兇 敵 の 害 を 脱れしに 困りて、手 を 拍ち、讃 歌 を 以て、惟

いち じんじ よ われら きた おんしゆ あが ほ  
一 の ハリス トス を 仁 慈 に 困りて 我 等 に 来りし 恩 主 と して 崇 め 讃 め よ。

いま いつ よよ  
今 も 何 時 も 世 世 に。 ア ミ ン。

イエつセイの根より生い出でし童貞女よ、爾は人性の法に超えて、世の無き先より在す父の

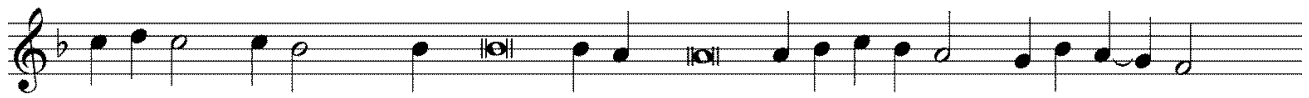
ことば う けだしかれみづか きい へりくだり もつ なんぢ ふういん たい とお よみ たま  
言 を 生めり、蓋 彼 親 ら 奇 異 なる 謙 卑 を 以て 爾 の 封 印 せし 胎 を 通らん こと を 嘉 し 給え  
り。



さんびた り リ ス ト ス や 、 なんぢ イ エ ッ セ イ の ね より い で た る え だ 、  
讃 美 爾 の 根 より 出 枝



お よ び そ の は な と して し ょ ぢ ょ よ り う ま れ り 、 か た ち な き も の  
及 其 花 處 女 より 生 り 、 形 ち な き も の



か つ か み や 、 なんぢ お つ と に ゆ か ざ る も の よ り み を う け て 、  
且 神 み や 、 爾 お 夫 と に 適 者 の よ り 身 を 受 て 、



か の し げ り た る や ま よ り き た り し も の な り 、 し ゅ や 、 なんぢ  
繁 山 より 来 り し も の な り 、 し ゅ 主 や 、 爾



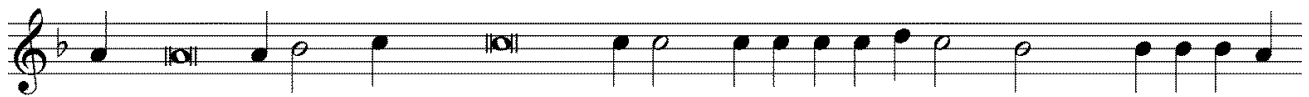
の ち か ら を さ ん よ う す 。  
力 を 讃 揚 揚 げ ます。



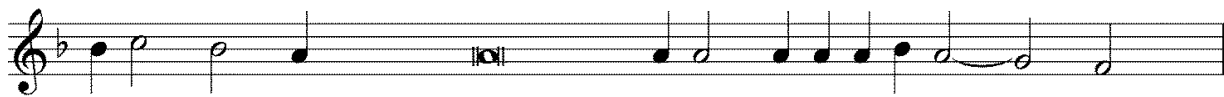
わ へ い の か み 、 じんじのちちや、なんぢわれらに  
和 平 神 仁 慈 の 父 や 、 爾 我 等



わ へ い を た も う なんぢのだいなるぎていのつかいをつかわせり。  
和 平 を 賜 う 爾 の 大 議 定 の 使 を 遣



ゆ え に わ れ ら か み を し る の ひ か り に み ち び か れ 、 よ す ぎ て  
故 に 我 等 神 を 知 の 光 り に 導 び か れ 、 夜 過



あ さ に なんぢひとをあいするのしゅをあげめほむ。  
朝 に 爾 人 と を あ い す る の し ゅ を あ が め ほ ん じ ゅ 讃 め む。

誦經) ハリストスはひととなゝいぜんかみ  
ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

ハリストスよ、なんぢめいしたがぼくせきのぼわれらてきつみぼくものじ  
由にし、まつたわれらごとまづ此の合一と體合とを以て塵に屬する者を神成し  
たま  
給えり。

ハリストスはひととなゝいぜんかみ  
ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

みいにしえよげんごとどうていぢよはらひととなかみうどうていぢようしな  
視よ、古に預言せし如く、童貞女は孕みて、人と爲りし神を生みて、童貞女たるを失  
はず。われらつみものかれよかみわぼくしんもつまことしょうしんぢよほうた  
我等罪なる者は彼に依りて神と和睦し、信を以て眞の生神女を讃め歌わん。

こうえいちちこせいしんき  
光榮は父と子と聖神に歸す、

しゅさいにくたいあらわもつわれらかれおきょうぼうあだまつたたましいほろぼ  
主宰は肉體に現るるを以て我等が彼に於ける兇暴の仇を全く絶ちて、靈を滅す  
ゆうけんしゃちからやぶせかいむけいものあわぞうぶつためちちちかものなたま  
有権者の力を敗り、世界を無形の者と合せ、造物の爲に父を邁づくべき者と爲し給えり。

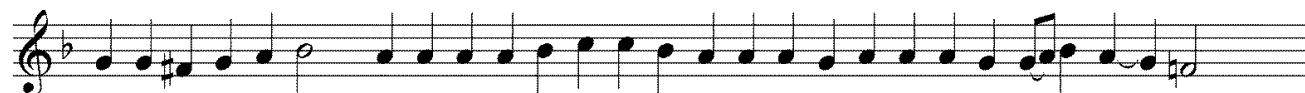
いまいつよよ  
今も何時も世世に。アミン。

むかしくらやみあたみついうえひかりかがやきみこいほうじんしぎょうかみいたら  
昔黒暗に在りし民は遂に上の光の輝煌を見たり。子は異邦人を嗣業として神に至ら

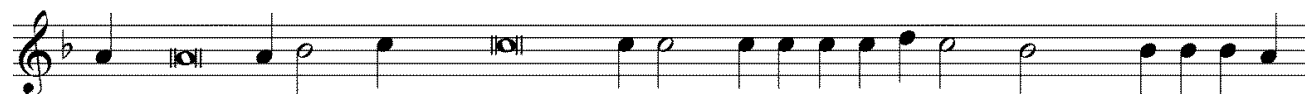
しめ、つみきわさかんところいがたおんちようあたたま  
しめ、罪の極めて熾なりし處に言ひ難き恩寵を予へ給う。



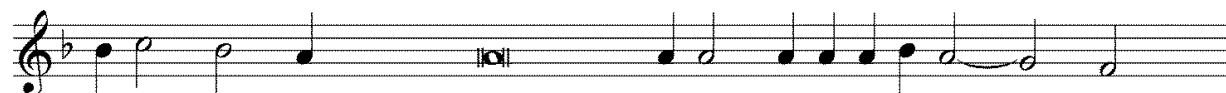
わへいのかみ、じんじのちちや、なんぢわれらに  
和平神仁慈父や、爾我等



わへいをたもうなんぢのだいなるぎていのつかいをつかわせり。  
和平賜爾大なる議定使遣



ゆえにわれらかみをしるのひかりにみちびかれ、よすぎて  
故我等神を知るの光りに導ちかれ、夜過



あさになんぢひとをあいするのしゅをあがめほ讃む。  
朝爾人を愛するの主を崇め讃む。



うみのおおうおイオナをうけしままうまれごのごとくはらよ  
海のお猛獣をうけしままうまれごのごとくはらよ

りいだせり。どうていぢよにいりてみ をうけしことばはそ  
出 童 貞 女 入 身 受 言 ば は そ 其

のきずなきをまもりてとおれり、けだしみづからやぶれに  
傷 守 通 蓋 自 壊

したがわらずうむものをもいたみのうしてまもれり。  
従 生 者 痛 無 守

誦經) ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

ちちしのめまえはらうたま わかみ じんたい もつ きたり しじょう てんぐん  
父が黎明の前に腹より生み給うハリストス吾が神は人體を以て來り、至淨なる天軍を

つかさど しゅ かちく かいぼふね お むつき つつ しよざい かさな なわめ と たま  
司る主は家畜の芻槽に置かれ、襦袢に裹まるれども諸罪の重れる縲紲を解き給う。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

ごうせい あらた おさなご うま こ しんじゃ たま かれ らいせい ちちおよ つかさ  
アダムの合成より新なる嬰兒は生れ、子は信者に賜わりたり。彼は來世の父及び幸に

おおい ぎじ ししや とな かれ だいのう かみ ばんぶつ そのけん たも たま しゅ  
して、大なる議事の使者と稱えらる、彼は大能の神にして、萬物を其權に保ち給う主なり。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

はじめ かみ とも あ かみことば いにしえ よわ われら せい まも ほつ いまみづか くだ  
太初に神と共に在りし神言は古より弱りたる我等の性を守らんと欲して、今親ら降

あらた これ たいごう またこれ しよよく じゆう もの な これ かた たま  
りて、新に之と體合し、復之を諸慾より自由なる者と爲して、之を固め給う。

いま いつ よよ  
今も何時も世世に。アミン。

ひかり お しゅ ひとひと すくい ため いまひく かいぼふね ふ あまん もの ざいあく くらやみ  
光に居る主、人人の救の爲に今卑くなりて、芻槽に臥すを甘ずる者は、罪惡の黑暗

しづ われら ため ふか おちい もの しよし おこ ため すえ きた たま  
に沈みたる我等の爲、深く陥りし者の諸子起さん爲に、アヴラアムの裔より來り給えり。

うみのおお うおイオナをうけしまま うまれご のごとくはらよ  
海 猛 獸 受 産 兒 如 腹

りいだせり。どうていぢよにいりてみ をうけしことばはそ  
出 童 貞 女 入 身 受 言 ば は そ 其

のきずなきをまもりてとおれり、けだしみづからやぶれに  
傷 守 通 蓋 自 壊

したがわずう むものをも いたみのうしてまもれ り。  
 従 生 者 のをも 痛 無 うして 守 れ り。

【 小聯禱 】

司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれ めよ。  
 主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅあわれ めよ。  
 主 憐

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリ

ストス神に委託せん、

しゅなんぢに。  
 主 爾

司祭) 蓋爾父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の國は讚榮せらる、今も何時も世に、

アミン。

【 降誕祭の小讃詞 】

いましよぢよは いましよぢよは えいざいのしゅを  
 今 処女 は 今 処女 は 永 在 の 主 を

うむしゅを うむ、  
 生 む しゅ を 生 む、

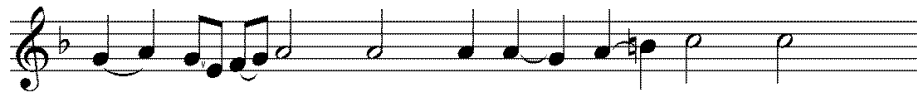
ち地 はち地はのせがたきものにほらをけんず  
 地 は 地 は の せ が た き も の に ほ ら を け ん ず



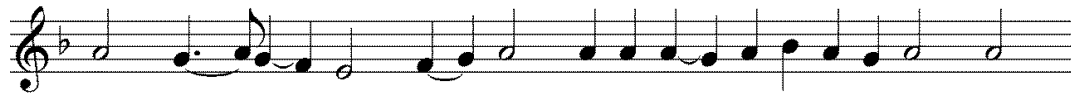
ほ ら を け ん ず 、  
洞 を 獻



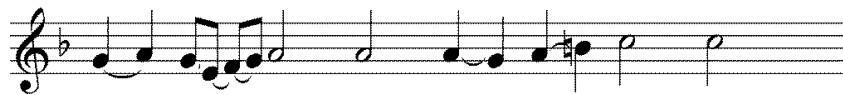
て ん の つ か い て ん の つ か い ぼ く し ゃ と と も に  
天 の 使 い 天 の 使 い 牧 者 と 偕



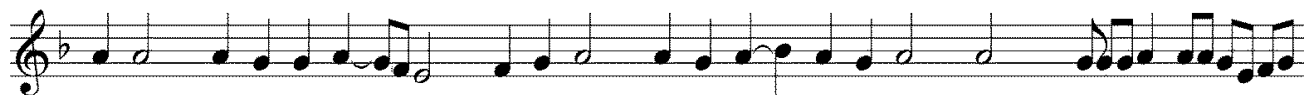
ほ め う と う ほ め う と う 、  
讃 め う 歌 と う 讃 め う 歌 と う 、



は か せ は は か せ は ほ し に し た が っ て  
博 士 は 博 士 は 星 に 従



た び す る た び す る 、  
旅 び す る 旅 び す る 、



け だ し わ れ ら の た め に え い き ゆ う の か み 、 み どり ご と し て う ま れ 生  
蓋 我 等 の た め に 永 久 の 神 嬰 児 生



た り 、 み どり ご と し て う ま れ た り 。  
嬰 児 と し て 生

【 イコス 同讃詞 第3調 】

誦經) ヴィフレムはエデムを<sup>ひら</sup>啓けり、<sup>きた</sup>來りて<sup>み</sup>觀るべし、我等<sup>われら</sup>隱<sup>ひそ</sup>なる處<sup>ところ</sup>に<sup>とみ</sup>富を<sup>え</sup>獲たり、<sup>きた</sup>來りて、<sup>ほら</sup>洞  
の<sup>うち</sup>内に<sup>らくえん</sup>樂園の<sup>ふく</sup>福を受けん。彼處<sup>かしこ</sup>に<sup>そそ</sup>灌がれずして<sup>ゆるし</sup>赦を<sup>しょう</sup>生ずる<sup>ね</sup>根は<sup>あらわ</sup>露れ、彼處<sup>かしこ</sup>に<sup>ほ</sup>掘らざる<sup>い</sup>井は<sup>い</sup>出  
でたり、<sup>むかし</sup>昔<sup>これ</sup>ダヴィドは<sup>の</sup>是より<sup>かつぼう</sup>飲まんことを<sup>かしこ</sup>渴望せり、彼處<sup>どうてい</sup>に<sup>ちよ</sup>童貞女<sup>せきし</sup>は<sup>う</sup>赤子を<sup>う</sup>生みて、<sup>う</sup>アダムと  
ダヴィドとの<sup>かわき</sup>渴を<sup>とど</sup>止めたり。故に我等<sup>ゆえ</sup>彼處<sup>われら</sup>に<sup>かしこ</sup>往かん、<sup>ゆ</sup>永久<sup>えいきゆう</sup>の<sup>かみ</sup>神は<sup>みどりご</sup>嬰兒として<sup>ここ</sup>此に<sup>うま</sup>生れ<sup>たま</sup>給え  
り。



と も に け い けん に や し な わ れ し わ ら べ は 、 ふ けん の め い を か え り み  
偕 敬 虔 養 童 不 虔 命 を 願

ずして、はげしき火をおそれず、すなわちほのおのあいだ  
 激 火 恐 乃 焰 間  
 にたつてうたえり、わがせんぞのかみや、なんぢを  
 立つ 歌 我 先 祖 神 爾  
 さんよ おす。  
 讃 揚

誦經) ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

ふえ 笛を吹く ぼくしゃ 牧者は しみよう 奇妙なる ひかり 光の あらわれ 顕見 であえり、 けだししゆ 蓋主の 光榮は 彼等を 照し、 てんし 天使は 籲び  
 て曰えり、 讃め 歌え、 ハリストス 生れたれば なり。 せんぞ 先祖の 神よ、 なんぢ 爾は 崇め 讃めらる。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

てんし 天使の ことば 言に したが 従いて たちまち 天軍は 籲べり、 いたか 至高 には 光榮 神に 歸し、 へいあん 地に 平安 降り、 ひと  
 には 恵 臨めり、 ハリストス は 出でて 光る。 せんぞ 先祖の 神よ、 なんぢ 爾は 崇め 讃めらる。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

ぼくしゃい 牧者曰えり、 こ 此の ことば 言は 何ぞや、 ゆ な 往きて、 成りし 事、 こと 神聖なる ハリストス を 観ん、 すなわち  
 レエムに 至り、 ふくはい 伏拜して、 う 生みし 者とも いた 歌えり、 せんぞ 先祖の 神よ、 なんぢ 爾は 崇め 讃めらる。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

しちばい 七倍 熱く せられたる 烈しく 燃ゆる 炎は 役者を 甚しく 焼き、 しょうしゃ 少者を 拯いて、 これ 榮冠  
 を 冠らしむ、 けいけん 敬虔の 爲に ゆたか 豊に 露を 賜う 主の 命に 困りて なり。

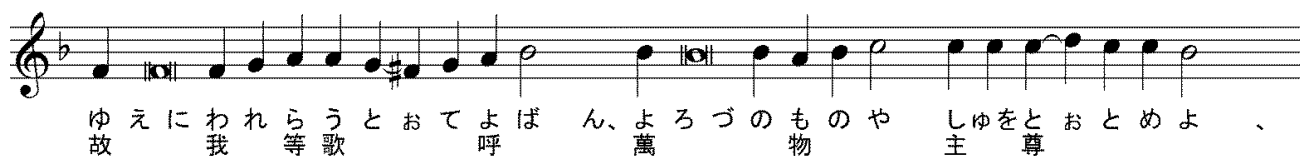
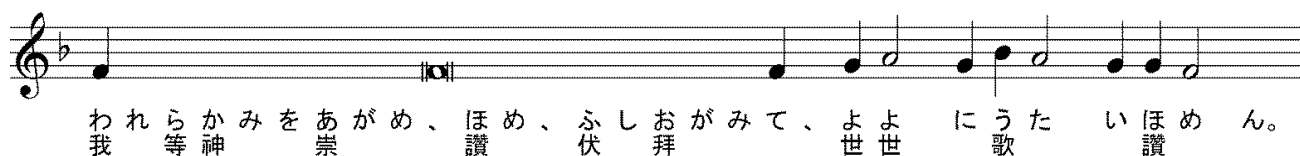
光榮は父と子と聖神に歸す、

きゆうしゆ 救主ハリストスよ、 なんぢ 爾は 言ひ 難く にくたい 肉體を 衣て、 ひとびと 人人の 敵を 辱しめたり、 けだしわれら 我等 嘗て 神  
 たる 榮福を 望みしに 困りて、 たか 高きより くらやみ 黒暗の 淵に 陥りしに、 いま 今 爾は 我が 像を 受けて、 われら  
 此の 榮福を 携え 給えり。

今も何時も世に。アミン。

おん 恩を 施す 主よ、 なんぢ 爾は 甘じて 肉體を 受けて、 己の 全能を 以て、 壊乱 せし 世界の 禁め 難

おご はぢ くる つみ ほろほ そのさき いざな もの いまあみ すく たま  
く 傲り、耻なく狂える罪を滅して、其先に誘いし者を今網より救い給う。



誦經) ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

ヴァヴィロンの女は 虜にせられしダヴィドの子をシオンより牽きて己に就かしめ、自ら己

こ はかせ つかわ ささげもの もたら かみ おのれ うち う むすめ ふくはい  
の子たる博士を遣し、獻物を齎して、神を己の内に受けしダヴィドの女に伏拜せしむ。

ゆえ われらうた よ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ばんせい ほ あ  
故に我等歌いて呼ばん、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

かなしみ がくき とお けだし しよし いほう ち あ うた い  
悲は樂器を遠ざけたり、蓋シオンの諸子は異邦の地に在りて歌わざりき、ヴィフレエムに出  
でて光れるハリストスはヴァヴィロンの悉くの迷謬と音樂の調和とを解き給えり。故に我等

うた よ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ばんせい ほ あ  
歌いて呼ばん、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

ハリストスは人と爲りて、依然として神なり。

く に えもの かす とみ と みちび ほし もつ その  
ヴァヴィロンはシオンの國の獲物と掠めたる富とを取れり、ハリストスは導く星を以て其  
たから せいがくしゃ おう つ たま ゆえ われらうた ことごと ぞうぶつ しゅ  
寶と星學者たる王とをシオンに就かしめ給う。故に我等歌いて呼ばん、悉くの造物は主  
あが ばんせい ほ あ  
を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

ちち こ せいしん いつ かみ あが ほ  
父と子と聖神の一なる神を崇め讃めん、

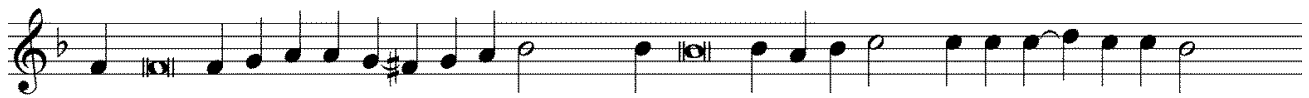
ことごと ぞうぶつ まよい よ かみ たつと がい まぬか しょうしゃ ごと おのの  
悉くの造物は、迷謬に因りて神として尊ばるる害を免れて、少者の如く戦きて、  
おのれ ひく かみことば つね うた ちえ もつ つく く もの おそ ふとう  
己を卑うせし神言を常に歌い、智慧を以て造られたれども、朽つる者として、恐れて不  
さんび かれ ささぐ  
當る讚美を彼に捧ぐ。

いま いつ もよよ  
今も何時も世に。アミン。

ばんみん さいこうしゃ なんぢ まよ ひと せい あ おか はな さ くさば かえ ため  
萬民の再興者よ、爾は迷える人の性を荒れたる丘より花の發きたる草場に歸さん爲に  
きた おのれ おもんばかり もつ ひとごろし きょうはく しゅけん ほろぼ ため ひとおよ かみ あらわ たま  
來りて、己の慮を以て、殺人者の強迫の主權を滅さん爲に、人及び神と現れ給  
えり。



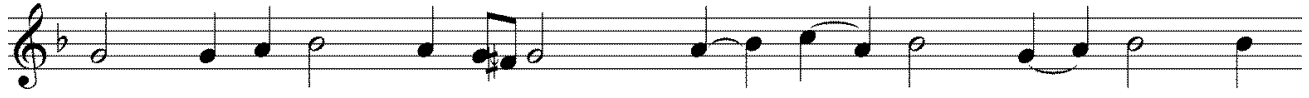




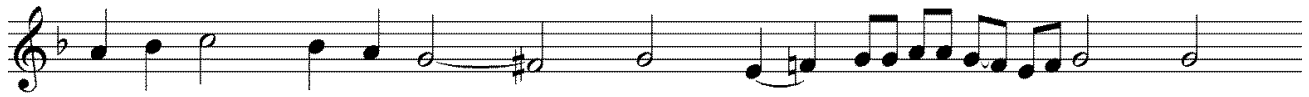
ゆえにわれらうとおてよばん、よろづのものやしゆをとおとめよ、  
故我等歌おて呼ん、萬ろづの物主尊



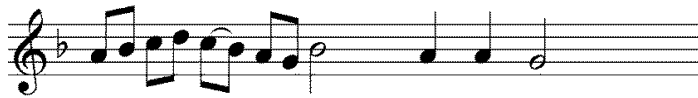
よよにかれをあげめほめよ。  
世世彼を崇め讃



わがたましいや、そんきとこ光うえい  
我靈ましいや、尊んきと光うえい



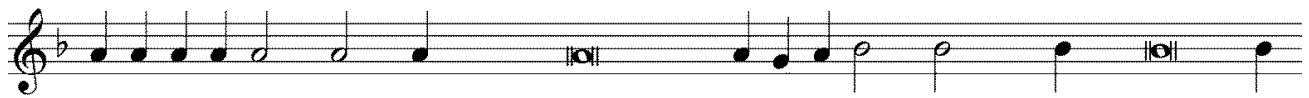
のてんぐんにまさるどてぢいときよき  
天軍んに優る童貞女至浄



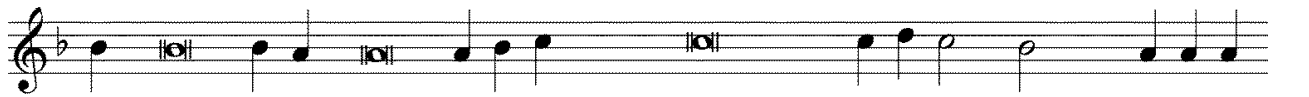
かみのははをほめあげよ。  
神母を讃あげよ



ひじうにしてきみうなるきせきをみる、ほらはてんとなり、  
非常にして奇妙なる奇蹟をみる、洞は天なり



どうていぢよはヘルヴムにかわるほうざとなり、かいばぶねは  
童貞女はヘルヴムに代わる寶座なり、かばぶねは



いれがたきハリストかみのふしたもうところとなれり、われら等  
内容難かきハリストかみのふしたもうところとなれり、我等



かれをあげめほむ。  
彼をあげめほむ

誦經) わがたましい どうていぢよ み うま かみ ほ あ  
我が靈よ、童貞女より身にて生れし神を讃め揚げよ。

はかせ あらた あらわ いちじる てん ひか きい しんせい つね うんこう み  
博士は、新に顯れて著しく天に光れる奇異なる新星の常ならぬ運行を觀て、ハリスト

おう われら すくい ため ちじょう うま さと  
ス王の我等の救の爲に地上にヴィフレムに生れしを悟れり。

わがたましい ほら うま おう ほ あ  
我が靈よ、洞に生れし王を讃め揚げよ。

はかせ あらた あらわ いちじる てん ひか きい しんせい つね うんこう み  
博士は、新に顯れて著しく天に光れる奇異なる新星の常ならぬ運行を觀て、ハリスト

おう われら すくい ため ちじょう うま さと  
ス王の我等の救の爲に地上にヴィフレムに生れしを悟れり。

わ たましい はかせ ふくはい かみ ほ あ  
我が 靈 よ、博士に伏 拜せられし神を讃め揚げよ。

ほし あらわ あらた うま おさな きみ いづこ あ われらこれ ふくはい ため きた はか  
星の 顯しし新に生れたる 幼き君は何處にか在る、我等之に伏 拜せん爲に來れりと、博  
せ い とき こころさわ いた いか かみ てき ころ はか  
士の言いし時、イロドは心 騒ぎて大きく怒り、神の敵としてハリストスを殺さんことを謀れり。

わ たましい ほし よ はかせ つた しゅ ほ あ  
我が 靈 よ、星に藉りて博士に傳えられし主を讃め揚げよ。

ほし あらわ あらた うま おさな きみ いづこ あ われらこれ ふくはい ため きた はか  
星の 顯しし新に生れたる 幼き君は何處にか在る、我等之に伏 拜せん爲に來れりと、博  
せ い とき こころさわ いた いか かみ てき ころ はか  
士の言いし時、イロドは心 騒ぎて大きく怒り、神の敵としてハリストスを殺さんことを謀れり。

わ たましい おう う いさぎよ どうていぢょ ゆいいち しょうしんぢょ ほ あ  
我が 靈 よ、ハリストス王を生みし 潔き童貞女、唯一の生 神女を讃め揚げよ。

はかせ みちび れいもつ たづさ ふくはい ほし あらわ  
イロドは、博士を 導きて禮物を攜えヴィフレムにハリストスに伏 拜せしむる星の現れし  
とき と ただかれら ほし よ ふるさと おく むざん こごろし はづか  
時を問えり、唯 彼等は星に依りて故 土に送られて、無慙なる殺児者を辱 しめたり。

はかせ ぼくしゃ しろ うま ふくはい ため きた  
博士と牧 者とはヴィフレムの城に生れしハリストスに伏 拜せん爲に來れり。

はかせ みちび れいもつ たづさ ふくはい ほし あらわ  
イロドは、博士を 導きて禮物を攜えヴィフレムにハリストスに伏 拜せしむる星の現れし  
とき と ただかれら ほし よ ふるさと おく むざん こごろし はづか  
時を問えり、唯 彼等は星に依りて故 土に送られて、無慙なる殺児者を辱 しめたり。

こんにちどうていぢょ ほら うち しゅさい う たま  
今日 童貞女は洞の中に主 宰を生み給う。

どうていぢょ おそ ゆえ もだ あやう よろ かな あい ゆえ しらべ  
童貞女よ、畏るるが故に黙すことは危 ならずして宜しきに適えり、愛するが故に 調の  
ととの うた つく やす もと はは われら ねつしん したが みづか われら ちから  
諧いたる歌を作ることは易からず、求む、母よ、我等の熱心に循いて、親ら我等に力を  
あた たま  
與え給え。

こんにちしゅさい せきし ははどうていぢょ うま たま  
今日 主宰は赤子として母 童貞女より生れ給う。

どうていぢょ おそ ゆえ もだ あやう よろ かな あい ゆえ しらべ  
童貞女よ、畏るるが故に黙すことは危 ならずして宜しきに適えり、愛するが故に 調の  
ととの うた つく やす もと はは われら ねつしん したが みづか われら ちから  
諧いたる歌を作ることは易からず、求む、母よ、我等の熱心に循いて、親ら我等に力を  
あた たま  
與え給え。

こんにちぼくしゃ むつき つつ かいばぶね ふ たま きゅうせいしゅ み  
今日 牧 者は襁褓に裹まれて 芻槽に臥し給う 救世主を見る。

あ あいさぎよ はは われらあきらか ぜんちよう す さ かげ み もの いまとぎ もん  
嗚呼 潔き母よ、我等 明ならざる前 兆と過ぎ去りし影とを見し者は今 閉せる門より  
あらた あらわ ことば しんじつ ひかり あお よろ かな なんぢ はら あが ほ  
新に 顯れたる言の眞實の光を仰ぎて、宜しきに合いて 爾の腹を崇め讃む。

こんにちさわ がた しゅさい せきし あら ぬの つつ  
今日 捫り難き主 宰は赤子として 籠き布に裹まる。

ああいさぎよ はは われらあきらか ぜんちよう す さ かげ み もの いまとざ もん  
嗚呼 潔 き母よ、我等 明 ならざる前 兆 と過ぎ去りし影とを見し者は今 閉せる門より

あらた あらわ ことば しんじつ ひかり あお よろ かな なんぢ はら あが ほ  
新に 顯れたる言の眞實の光を仰ぎて、宜しきに合いて爾の腹を崇め讃む。

こんにちばんぶつ たの よろこ どうていしょうぢよ うま たま よ  
今日萬物は樂しみて喜ぶ、ハリストスが童貞少女より生れ給いしに因る。

ああいさぎよ はは われらあきらか ぜんちよう す さ かげ み もの いまとざ もん  
嗚呼 潔 き母よ、我等 明 ならざる前 兆 と過ぎ去りし影とを見し者は今 閉せる門より

あらた あらわ ことば しんじつ ひかり あお よろ かな なんぢ はら あが ほ  
新に 顯れたる言の眞實の光を仰ぎて、宜しきに合いて爾の腹を崇め讃む。

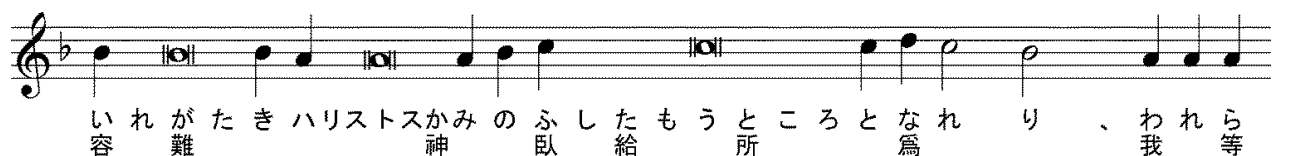
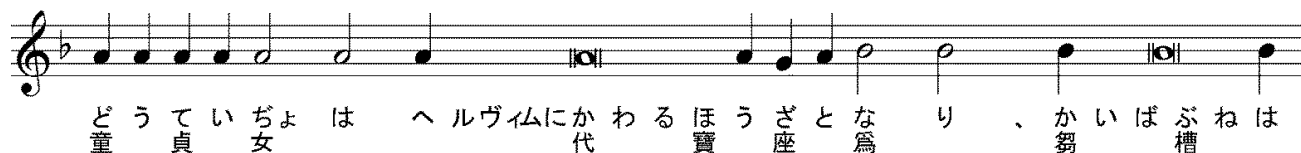
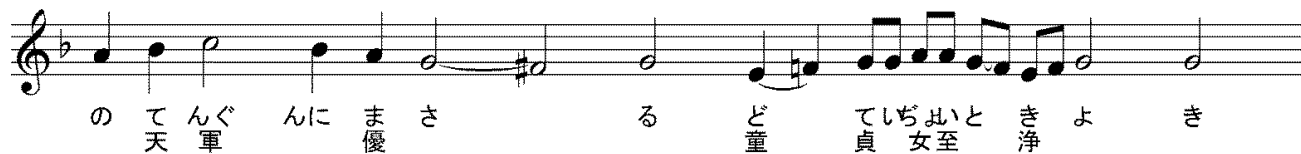
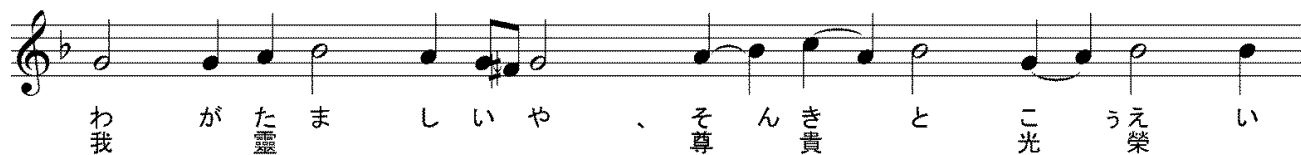
てん ぐん うま きゅうせいしゅ きみ しゅさい よ つた  
天の軍は生れし救世主、君、主宰を世に傳う。

わ たましい さんい わか しんせい けんべい ほ あ  
我が 靈よ、三位にして分れざる神性の權柄を讃め揚げよ。

わ たましい われら のろい のが どうていぢよ ほ あ  
我が 靈よ、我等を 詛より脱れしめし童貞女を讃め揚げよ。

あい たみ ねが ところ え かみ のぞ たま かたじけな いまいのち ほどこ あらため  
ハリストスを愛する民は願う所を獲、神の臨み給うを辱うして、今生命を施す復新

ま しじょう どうていぢよ かみ こうえい ふくはい おんちよう あた たま  
を俟つ。至 淨なる童貞女よ、神の光榮に伏拜する恩寵を與え給え。



誦經) <sup>こんにちどうていぢよ ほら うち しゅさい う たま</sup> 今日 童貞女は洞の中に主宰を生ま給う。



おそれによつて もくねんをたもつばぶじにしててきぎなり、かつどうていぢよ  
畏 然 然 保 無 事 適 宜 且 童 貞 女  
や、な んぢをあいするによつて しらべのよ く まと うせ るうた  
爾 愛 調 全 せ る 歌  
をつくるは やすから ず、しかも な んぢ は は や み 自  
作 易 母 は や み 自  
づから わが ねし んにお うじて ちからをさづけたま え  
我 熱 心 応 じ て 力 を 授 け た ま え

【 光耀歌 】

誦經) <sup>われら きゆうせいしゅ ひがし ひがし うえ われら のぞ くらやみ かげ おもの しんじつ え</sup>我等の救世主、東の東は、上より我等に望みしに、幽暗と陰翳とに居る者は眞實を獲  
<sup>けだししゅ どうていぢよ うま たま</sup>たり、蓋主は童貞女より生れ給えり。

<sup>こうえい ちち こ せいしん き</sup>  
光榮は父と子と聖神に歸す、

<sup>われら きゆうせいしゅ ひがし ひがし うえ われら のぞ くらやみ かげ おもの しんじつ え</sup>  
我等の救世主、東の東は、上より我等に望みしに、幽暗と陰翳とに居る者は眞實を獲  
<sup>けだししゅ どうていぢよ うま たま</sup>たり、蓋主は童貞女より生れ給えり。

<sup>いま いつ よよ</sup>  
今も何時も世々に。アミン。

<sup>われら きゆうせいしゅ ひがし ひがし うえ われら のぞ くらやみ かげ おもの しんじつ え</sup>  
我等の救世主、東の東は、上より我等に望みしに、幽暗と陰翳とに居る者は眞實を獲  
<sup>けだししゅ どうていぢよ うま たま</sup>たり、蓋主は童貞女より生れ給えり。

【 第148聖詠 (凡そ呼吸ある者 <sup>ステイヒラ</sup> 讚頌) 】



およそい きあるものはしゅをほめ あげよ、てんよりしゅをほめ あ揚  
凡 呼 吸 者 の は しゅ を ほ め あ げ よ 、 て ん よ り しゅ を ほ め あ 揚  
げよ、いとたか きにかれをほめ あげよ、ほめうたはなんぢ  
至 高 彼 を ほ め あ げ よ 、 ほ め う た は な ん ぢ



誦經) 日と月よ、彼を讃め揚げよ、悉くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。諸天の天と天より上なる

みづ か れ ほ あ しゅ な ほ あ けだしかれい すなわちな めい すなわち  
 水よ、彼を讃め揚げよ。主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言いたれば、昂成り、命じたれば、昂

つく か れ これ た よよ いた のり あた これ こ ち しゅ ほ あ  
 造られたり、彼は之を立てて世世に至らしめ、則を與えて之を躓えざらしめん。地より主を讃め揚

げよ、大魚と悉くの淵、火と霰、雪と霧、主の言に従う暴風、山と悉くの陵、果

の樹と悉くの栢香木、野獸と諸の家畜、匍う物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地

の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、蓋惟其名は高く擧げられ、

其光榮は天地に徧し。彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イスライリの諸子、彼に親し

き民の榮を高くせり。

【 第149聖詠 】

あらた うた しゅ うた そのさんび せいしや かい あ おのれ ぞうせいしゅ ため たの  
 新なる歌を主に歌え、其讚美は聖者の會に在り。イスライリは己の造成主の爲に樂し

むべし、シオンの諸子は己の王の爲に喜ぶべし。舞を以て彼の名を讃め揚げ、鼓と琴とを以

て彼に歌うべし、蓋主は其民を恵み、救を以て謙卑の者を榮えしむ。諸聖人は光榮に在

りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし。其口には神の讚榮あり、其手には兩刃の劍あるべし、仇

を諸民に報い、罰を諸族に行い、其諸王を索にて縛り、其諸侯を鐵の鎖にて繋ぎ、彼

ら等の爲に記されし審判を行わん爲なり。斯の榮は其悉くの聖人に在り。

【 第150聖詠 】

かみ そのせいしよ ほ あ か れ そのゆうりよく おおぞら ほ あ  
 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

そのけんのう よ か れ ほ あ そのいと おごそか よ か れ ほ あ  
 其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

ラツパ こえ もつ かれ ほ あ きん しつ もつ かれ ほ あ  
角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

ぎじん たの しょうてん よろこ しょうざん おど うま たま よ どうていちよ  
義人よ、樂しめ、諸天よ、喜べ、諸山よ、躍れ、ハリストス生れ給いしに因る。童貞女は  
ヘルヴィムに似て坐して、身を取りし神言を其懐に抱き、牧者は生れし者を奇とし、博士は  
しゅさい れいもつ ささ てんし うた い さと がた しゅ こうえい なんぢ き  
主宰に禮物を獻げ、天使は歌いて言う、悟り難き主よ、光榮は爾に歸す。

つづみ まい もつ かれ ほ あ いと しょう もつ かれ ほ あ  
鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

きゆうせいしゅ う しょうしんどうていちよ なんぢ はじめ のろい むな けだしちち あいれん  
救世主を生みし生神童貞女よ、爾はエヴァの初の詛を虚しくせり、蓋父の愛憐  
はは な み と かみことば ふところ いた たま ひみつ こころみ ゆる われらみなただしん もつ  
の母と爲りて、身を取りし神言を懐に抱き給う。秘密は試を容さず、我等皆唯信を以  
これ さんえい なんぢ とも よ い い がた しゅ こうえい なんぢ き  
て之を讚榮し、爾と偕に籲びて曰う、言い難き主よ、光榮は爾に歸す。

わせい ばつ もつ かれ ほ あ たいせい ばつ もつ かれ ほ あ  
和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ。

きた きゆうせいしゅ はは さん のち なおどうていちよ あらわ もの うた おうおよ かみ い  
來りて、救世主の母、産の後にも仍童貞女と顯れし者を歌わん。王及び神の生ける  
まち よろこ こうち い すくい な たま われら とも なんぢ さんび  
邑よ、慶べ、ハリストスは此の内に居て、救を成し給えり。我等ガヴリイルと偕に爾を讚美  
ぼくしゃ とも さんえい よ しょうしんぢよ なんぢ み と もの われら すく いの  
し、牧者と偕に讚榮して籲ぶ、生神女よ、爾より身を取りし者に我等を救わんことを祈り  
たま  
給え。

およ いき もの しゅ ほ ほ  
凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

ちち ゆる ことば にくたい な どうていちよ ひと な かみ う たま ほし しめ はかせ ふく  
父は許し、言は肉體と爲り、童貞女は人と爲りし神を生み給えり。星は示し、博士は伏  
はい ぼくしゃ き ばんぶつ よろこ  
拜し、牧者は奇とし、萬物は歡ぶ。

こうえい ちち こ せいしん き  
光榮は父と子と聖神に歸す、

なんぢ ち くだ ときいた てんか はじめ とうせき おこな そのときなんぢ おのれ こうたん しん  
爾が地に降る時至りて、天下に初の登籍は行われたり。其時爾は己の降誕を信ず  
ひとびと な する のぞ たま ゆえ か ごと めい くだ けだしなんぢ こう  
る人人の名を記さんことを望み給えり、故に此くの如き命はケサリより下りき、蓋爾の降  
たん なんぢ えいえん くに さいじょう けん あらた これ よ われら しさん みつぎ か  
誕にて爾が永遠の國の最上の權は新にせられたり、之に因りて我等も資産の貢に代え  
なんぢかみおよ わ たましい きゆうしゅ せいきょう しんがく とみ たてまつ  
て、爾神及び我が靈の救主に正教の神學の富を獻る。



いまハリストスはビフレエムにどうていぢよよ りうま れ、いまはじめなき  
 今 童 貞 女 生 れ、今 始

ものははじめられ、ことばはみをと取り、てんぐんは  
 者 始 言 身 取 天 軍

よろこび、ちはひとびととともたのしみ、はかせは  
 喜 地 人 人 借 樂 博 士

しゅさいにれいもつをたてまつり、ぼくしゃはうまれしものを  
 主 幸 禮 物 獻 牧 者 生 者

つたえ、われらはたえずよぶ、いとたかきには  
 傳 え 我 等 絶 呼 ぶ 至 高

こうえいかみにきし、ちにはへいあんくだり、ひとに  
 光 榮 神 歸 し 地 平 安 降 り 人

めぐみはのぞめり。

【 だいえいしょう 大詠頌 】

司祭) こうえい なんぢわれら ひかり あら しゅ き  
 光 榮 は 爾 我 等 に 光 を 顯 わ せ る 主 に 歸 す。

いとたかきにはこうえいかみにきし、ちにはへいあんくだり、  
 至 高 光 榮 神 歸 し 地 平 安 降 り

ひとにはめぐみのぞめり、しゅてんのおう、かみちちぜんのおうしゃ  
 人 恵 臨 り 主 天 王 神 父 全 能 者

よ、しゅどくせいの子、およびせいしんよ、なんぢの  
 主 獨 生 子 及 び 聖 神 爾

おおいなるこうえいによりて、われらなんぢをあがめ、なんぢを  
 大 光 榮 に 因 り て 我 等 爾 を 崇 敬 せ ぬ

ほめあげ、なんぢをふしおがみ、なんぢをとうとみうたい、なんぢに  
 讚揚 爾 伏 拜 爾 尊 歌 爾

かんしゃす。しゅかみよ、かみのこひつじ、ちちのこ、よの  
 感謝 主 神 神 羔 父 子 世

つみをにないしものよ、われらをあわれみたまえ、よのもろも  
 罪 任 ない 者 の よ、 我 等 を 憐 れ み た ま え、 世 の 諸

ろのつみをにないしものよ、われらのいのりをいれたまえ。  
 罪 任 ない 者 の よ、 我 等 の 祈 り を い れ た ま え。

ちちのみぎにぎするものよ、われらをあわれみたまえ。なんぢは  
 父 右 座 者 の よ、 我 等 を 憐 れ み た ま え。 なんぢ は

ひとりせいなり、なんぢはひとりしゅイススハリストス、かみちちの  
 獨 聖 なる 爾 獨 主 神 父

こうえいをあらわすものなればなり、アミン。  
 光 榮 顯 者 の な れ ば な り、 ア ミ ン。

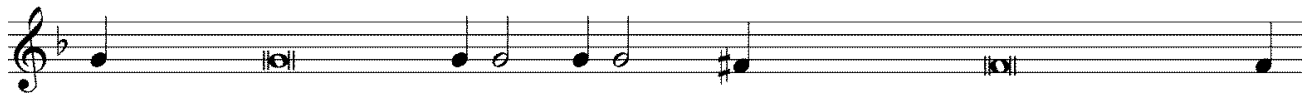
われひびになんぢをほめあげ、なんぢの名をよよにあがめうたわん。  
 我 日 日 爾 を 讚 揚 げ、 爾 の 名 を 世 世 に 崇 敬 う た わ ん。

しゅよわれらをまもり、つみなくしてこのひをわたらせたま  
 主 我 等 を 守 り、 罪 を なく して この 日 を わ た ら せ た ま

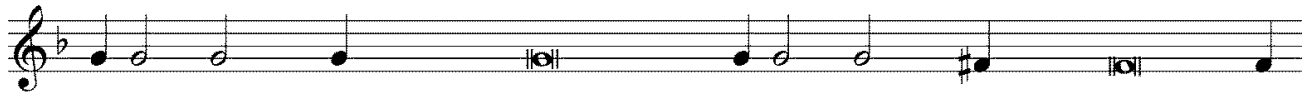
え。しゅわがせんぞのかみよ、なんぢはあがめほめられなんぢの名  
 主 吾 先 祖 神 の よ、 爾 は 崇 敬 せ ら れ る 爾 の 名

よよにとみうたわる、アミン。  
 世 世 に 尊 敬 う た わ る、 ア ミ ン。

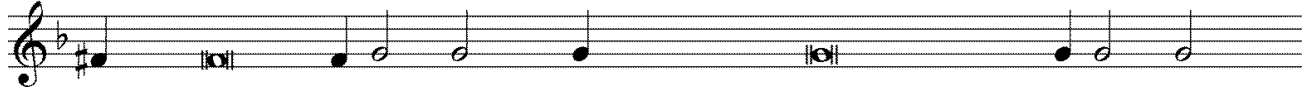




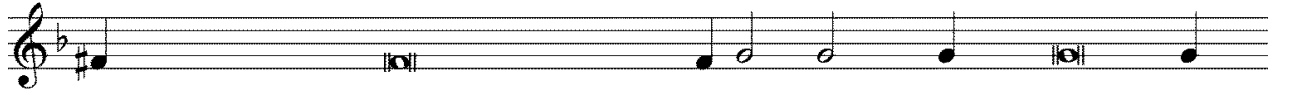
しゅよ、なんぢをたのむによりて なんぢのあわれみをわれらにたれ  
主 爾 恃 因 りて 爾 憐 我 等 垂



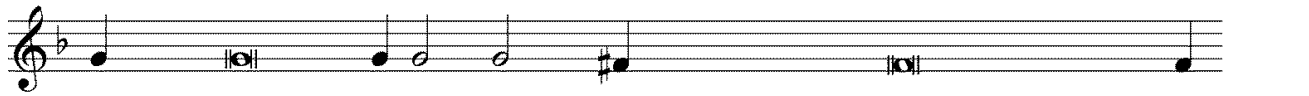
たまえ。しゅよ、なんぢはあがめほめらる、なんぢのいましめを  
給 主 爾 崇 讃 る、 爾 誠



われにおしえたたまえ。しゅさいよ、なんぢはあがめほめらる、  
我 訓 給 主 宰 爾 崇 讃 る、



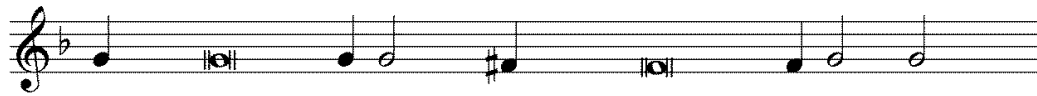
なんぢのいましめをわれにさとせたまえ。せいなるものよ、  
爾 誠 我 悟 給 え。 聖 者



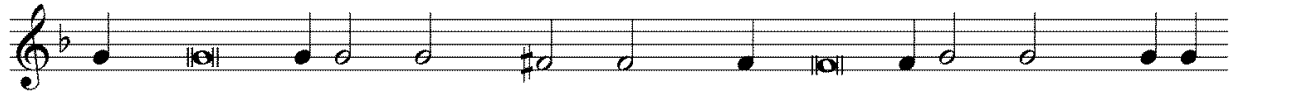
なんぢはあがめほめらる、なんぢのいましめにてわれをてらし  
爾 崇 讃 る、 爾 誠 我 照



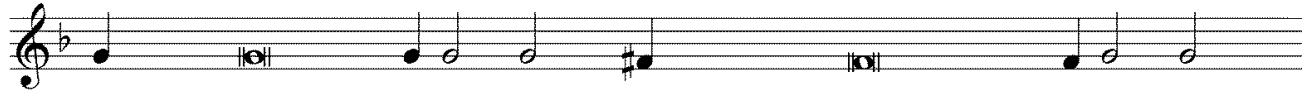
たまえ。  
給



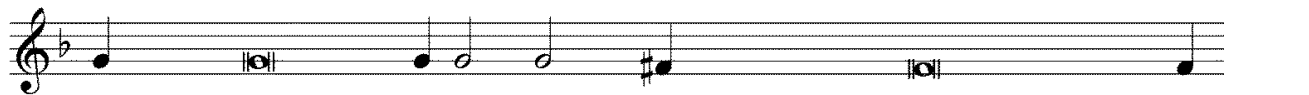
しゅよ、なんぢはよよ世、われらのかくれがたり。  
主 爾 世 世 我 等 避 所



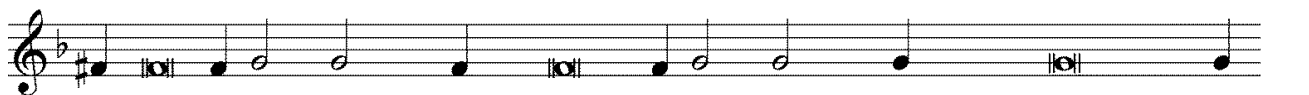
われかつていえり、しゅよ、われをあわれみ、わが  
我 曾 言 り、 主 我 憐 我



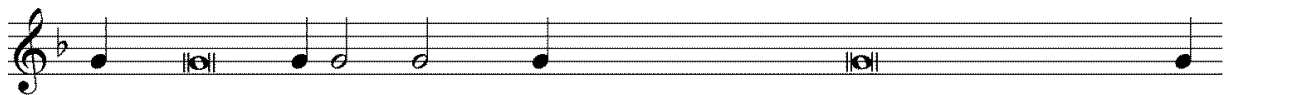
たましいをいやしたたまえ、われつみをなんぢにえたればなり。  
靈 醫 給 我 罪 爾 得



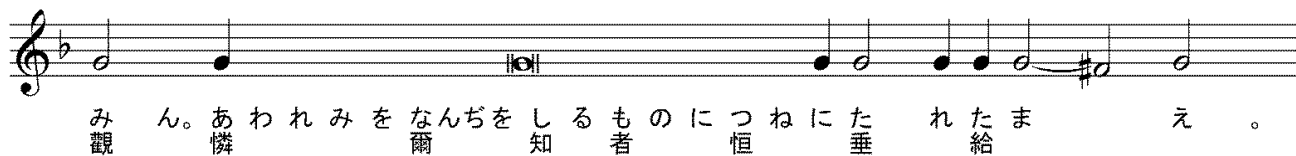
しゅよ、なんぢにはしりつく、なんぢのむねをおこなうをわれに  
主 爾 趨 附 く、 爾 旨 行 我



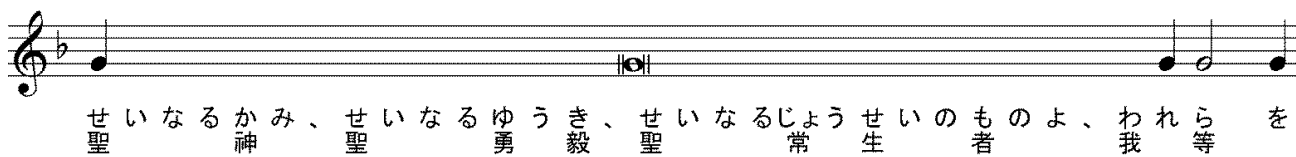
おしえたたまえ、なんぢはわれのかみ、いのちのみなもとは  
教 給 主 爾 我 神 命 源



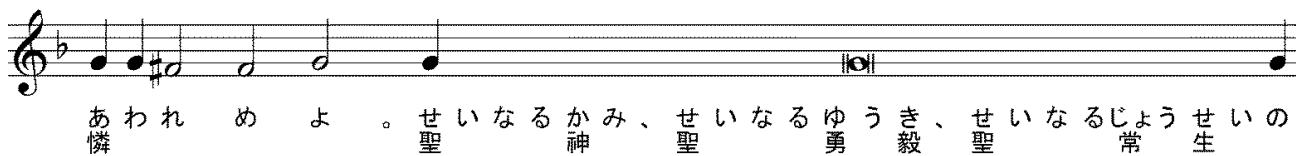
なんぢにあればなり、われらなんぢのひかりにおいてひかりを  
爾 在 我 等 爾 光 於 光



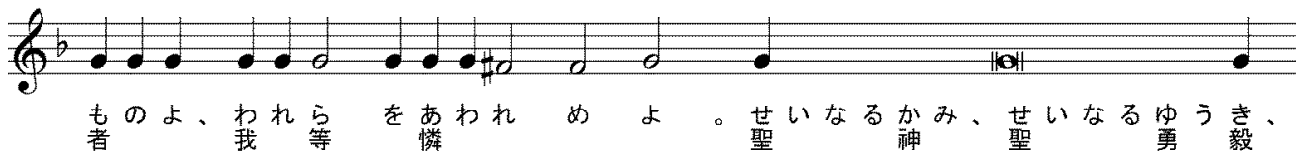
み 観 人。あ 憐 わ れ み を な ん ぢ を し る も の に つ ね に た れ た ま え 。  
爾 知 者 恒 垂 給



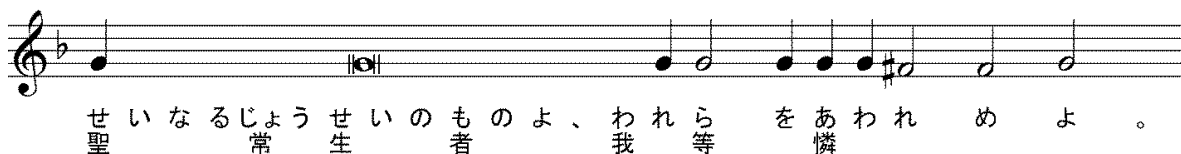
せ い な る か み、せ い な る ゆ う き、せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、わ れ ら を  
聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者 我 等



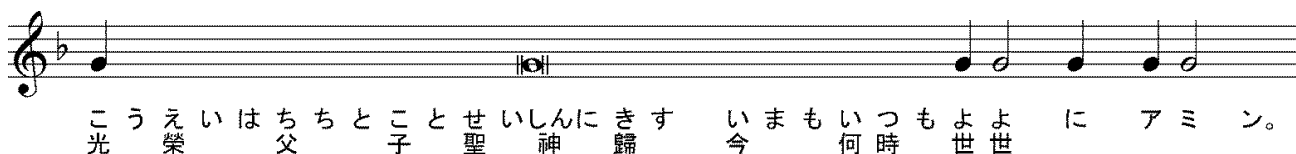
あ わ れ め よ 。 せ い な る か み、せ い な る ゆ う き、せ い な る じ ょ う せ い の  
憐 聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生



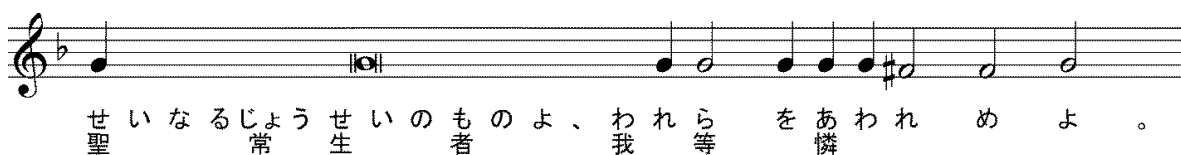
も の よ、わ れ ら を あ わ れ め よ 。 せ い な る か み、せ い な る ゆ う き、  
者 我 等 憐 聖 神 聖 勇 毅



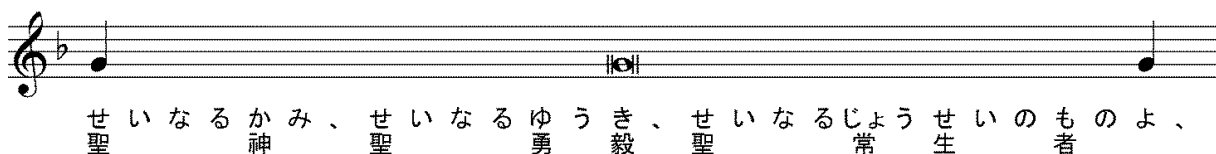
せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、わ れ ら を あ わ れ め よ 。  
聖 常 生 者 我 等 憐



こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン。  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世



せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、わ れ ら を あ わ れ め よ 。  
聖 常 生 者 我 等 憐



せ い な る か み、せ い な る ゆ う き、せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、  
聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者

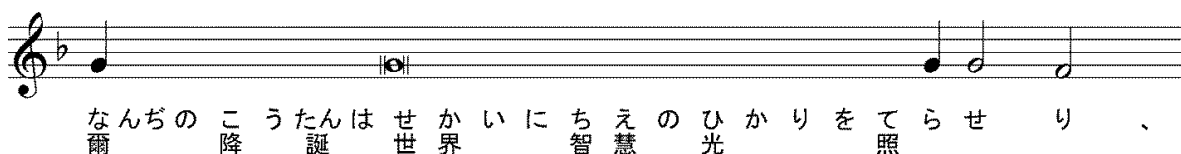


わ れ ら を あ わ れ め よ 。  
我 等 憐

アポリテキオン  
【 発 放 讚 詞 】



ハリスツス わ が か み よ、  
我 神



な ん ぢ の こ う た ん は せ か い に ち え の ひ か り を て ら せ り、  
爾 降 誕 世 界 智 慧 光 照

これによりてほしにつとむるものはほしにおしえられて、  
 此 由 星 勤 る 者 は 星 教

なんぢのひをおがみ、なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
 爾 義 日 拝 み 爾 上 東 覺

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 爾 歸 す。

【 重聯禱 】

司祭) 神よ、<sup>なんぢ</sup>爾の大なる<sup>あわれみ</sup>憐に因りて我等を<sup>われら</sup>憐めよ、<sup>なんぢ</sup>爾に禱る、<sup>いの</sup>聆き納れて<sup>あわれ</sup>憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 又我國の<sup>またわがくに</sup>天皇及<sup>てんのうおよ</sup>び國を<sup>くに</sup>司<sup>つかさど</sup>る者の<sup>もの</sup>爲に<sup>ため</sup>禱る、<sup>いの</sup>

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

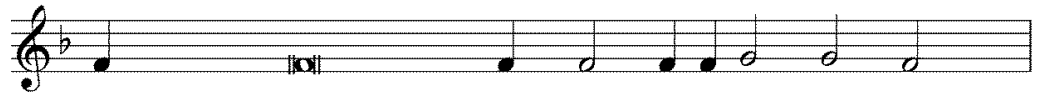
司祭) 又<sup>また</sup>教會を<sup>きょうかい</sup>司<sup>つかさど</sup>る尊貴なる<sup>そんき</sup>我等の<sup>われら</sup>全<sup>ぜん</sup>日本<sup>にっぽん</sup>の<sup>ふしゅきょう</sup>府主教<sup>ふしゅきょう</sup>ダニエル、<sup>そんき</sup>尊貴なる<sup>せんだい</sup>仙台<sup>せんだい</sup>の大<sup>だい</sup>主教<sup>しゅきょう</sup>セラフィム、<sup>およ</sup>及び<sup>お</sup>ハリストスに<sup>ことごと</sup>於ける<sup>われら</sup>悉<sup>けいてい</sup>くの<sup>ため</sup>我等の<sup>いの</sup>兄弟<sup>あいの</sup>の爲に<sup>いの</sup>禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 又<sup>また</sup>恒に<sup>つねに</sup>記憶<sup>きおく</sup>せらるる<sup>ふく</sup>福<sup>こ</sup>たる<sup>せいどう</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>こんりゅうしゃ</sup>聖堂<sup>せいどう</sup>の<sup>およ</sup>建<sup>す</sup>立<sup>ねむ</sup>者<sup>ことごと</sup>、<sup>ふそけいてい</sup>及び<sup>こ</sup>既に<sup>こ</sup>寝<sup>こ</sup>りし<sup>こ</sup>悉<sup>ふそけいてい</sup>くの<sup>こ</sup>父<sup>こ</sup>祖<sup>こ</sup>兄弟<sup>こ</sup>、<sup>こ</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>地方<sup>こ</sup>と<sup>こ</sup>に<sup>こ</sup>葬<sup>こ</sup>られたる<sup>こ</sup>正<sup>こ</sup>教<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>者<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>爲<sup>こ</sup>に<sup>こ</sup>禱<sup>こ</sup>る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 又<sup>また</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>しよぼくこ</sup>諸<sup>せいどう</sup>僕<sup>けいてい</sup>此<sup>じれん</sup>の<sup>せいめい</sup>聖<sup>へいあん</sup>堂<sup>そうけん</sup>の<sup>きゅうしよく</sup>兄<sup>けんこ</sup>弟<sup>かんゆう</sup>に、<sup>およ</sup>慈<sup>およ</sup>憐<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>生<sup>およ</sup>命<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>平<sup>およ</sup>安<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>壯<sup>およ</sup>健<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>救<sup>およ</sup>贖<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>眷<sup>およ</sup>顧<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>寛<sup>およ</sup>宥<sup>およ</sup>、<sup>およ</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>およ</sup>諸<sup>およ</sup>罪<sup>およ</sup>の<sup>およ</sup>赦<sup>およ</sup>を<sup>およ</sup>賜<sup>およ</sup>わ<sup>およ</sup>ん<sup>およ</sup>が<sup>およ</sup>爲<sup>およ</sup>に<sup>およ</sup>禱<sup>およ</sup>る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて爾の

大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

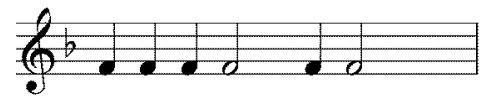
よよ世に、



アミン。

【 増聯禱 】

司祭) 我等主の前に吾が朝の禱を増し加えん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



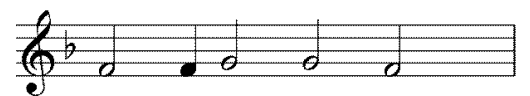
しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



しゅたまえよ。  
主 賜

司祭) 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



しゅたまえよ。  
主 賜

司祭) われら つみ あやまち なた ゆる しゅ もと  
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



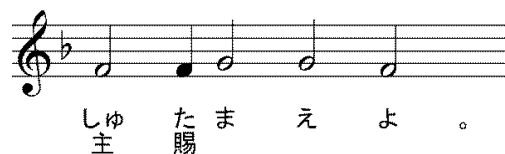
司祭) われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと  
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと  
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) われら いのち おわり がハリスティアニンに かな やまい はじ へいあん およ  
我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリスト  
スの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



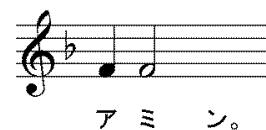
司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい じょさい しょうしんじょ えいていどうじょ しょせいじん  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

きおく われらおのれ み およ たがい おのおの み も ならび ことごと われら いのち も  
を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリ  
ストス神に委託せん、



司祭) けだしなんぢ じんじ じれん じんあい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ  
蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

よよ  
世に、



司祭) しゅうじん へいあん  
衆人に平安



なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) 我等の首を主に屈めん



しゅなんぢに。  
主 爾

司祭) 蓋我が神よ、我等を憐みて救うこと爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、  
いまいつよよ  
今も何時も世々に、



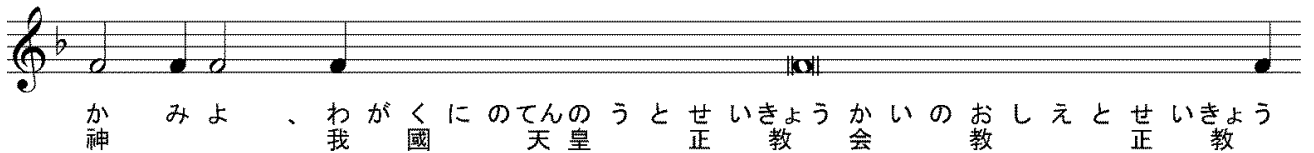
アミン。

司祭) 睿智、

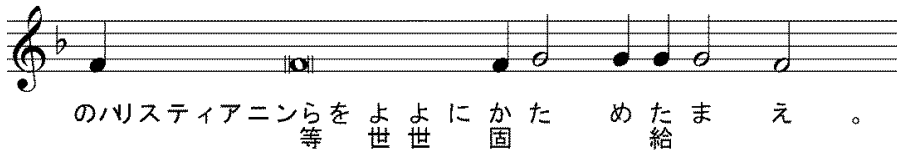
司祭) 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



アミン。

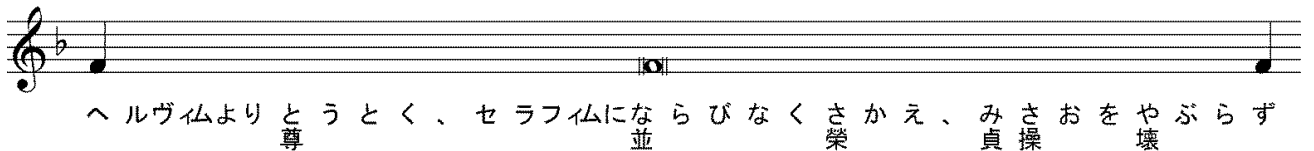


かみよ、わがくにのてんのうとせいきょうかいのおしえとせいきょう  
神 我 國 天 皇 正 教 会 教 正 教

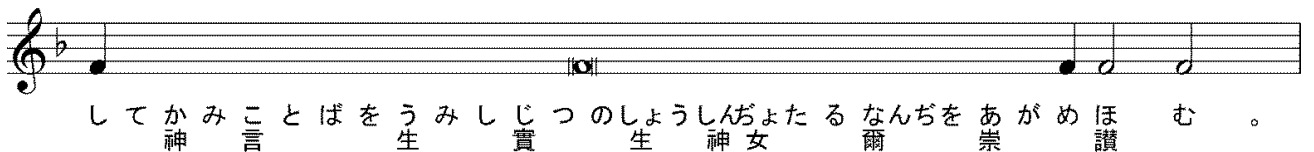


のハスティアニンらをやよにかためたまえ。  
等 世 世 固 め 給 え

司祭) 至聖なる生神女よ、我等を救い給え、



ヘルヅムよりとうとく、セラフムにならびなくさかえ、みさおをやぶらず  
尊 並 榮 貞 操 壊



してかみことばをうみしじつのしょうしんぢよたるなんぢをあがめほむ。  
神 言 生 貴 生 神 女 爾 崇 讃 む

司祭) ハリストス神我等の侍よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



こうえいはちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだせ。  
主 憐 主 憐 主 憐 福 降

司祭) ハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、( 某 )、日本の

あしとしゅきょうせい せい ぎ かも そふほ およ およ しよせいじん きとう  
使徒主 教 聖ニコライ、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ及び諸聖人の祈禱に

よ われら あわれ すく かれ ぜん ひと あい しゅ  
因りて我等を 憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、



アミン。



かみよ、わがくにのてんのう、およびくにをつかさどる  
神 我 國 天 皇 及 國 司



もの、われらのふしゅきょうダニイル、だいしゅきょうセラフィム、および  
者 我 等 府 主 教 大 主 教 及



ことごとくのせいきょうのハリストティアンら を、いくとせにもまもり  
悉 正 教 等 を 幾 歳 にも 護 り



たまえ。

(早課終わり)